正法眼蔵随聞記

正法眼蔵随聞記 第一

侍者 懐奘 編

第一巻

第一章

一日、示して云く。
続高僧伝の中に、
或禅師の会下に一僧あり。
金像の仏と、また仏舎利とをあがめ用いて、
衆寮等にありても常に焼香、礼拝し、恭敬、供養しき。
有時、禅師の云く、
「汝が崇むる所の仏像、舎利は、後には汝がために不是あらん」と。
其の僧、うけがわず。
師、云く、
「是れ、天魔波旬の作す所なり、
早く是れを棄つべし」
其の僧、憤然として出ぬれば、師、すなわち、僧の後えに云ひ懸けて云く、
「汝、箱を開いて是れを見るべし」と。
其の僧、いかりながら是れを開いてみれば、毒蛇、わだかまりて臥せり、と。
是れを以て思うに、
仏像、舎利は如来の遺像、遺骨なれば、恭敬すべし、といえども、また、
「偏に是れを仰いで得悟すべし」と思わば、還って邪見なり。
天魔、毒蛇の所領となる因縁なり。
仏説の功徳は定まれる事なれば、人天の福分となること生身と等しかるべし。
総じて三宝の境界を恭敬、供養すれば、罪、滅び、功徳を得、また、悪趣の
業をも消し、人天の果をも感ずることは実なり。

「是れによりて法の悟りを得ん」と思うは僻見なり。

仏子と云うは、仏教に順じて直に仏位に到る為なれば、只、教に随いて工夫、弁道すべきなり。

其の教に順ずる実の行と云うは、即、今の叢林の宗とする只管打坐なり。

是れを思うべし。

第二章

また云く、

「戒行、持斎を守護すべければ」とて、強いて宗として是れを修行に立て、「是れによりて得道すべし」と思うも、また、これ、非なり。

只、是れ、衲僧の行履、仏子の家風なれば、随い行うなり。是れを能き事と云えばとて、必ずしも宗とすることなかれ。

然あれば、とて、「破戒、放逸なれ」というには非ず。

若し、また、かくの如く執せば、邪見なり。

外道なり。

只、仏家の儀式、叢林の家風なれば、随順しゆくなり。是れを宗とする事、宋土の寺院に寓せし時に、衆僧にも見え来らず。

実の得道のためには唯、坐禅、工夫、仏祖の相伝なり。

是れによりて一門の同学、五眼房、故葉上僧正の弟子が、唐土の禅院にて、持斎をかたく守りて戒経を終日、誦せしをば、教えて捨てしめたりしなり。

第三章

懐奘、問うて云く、

叢林、学道の儀式は百丈の清規を守るべきか？

然あれば、「彼れ、はじめに、受戒、護戒を以て先とす」と見えたり。

また、今の伝来、相承は「根本戒をさずく」とみえたり。

当家の口訣、面授にも、西来、相伝の戒を学人にさずく。

是れ、便ち、今の菩薩戒なり。

然あるに、今の戒経に、「日夜に是れを誦せよ」と云えり。

何ぞ、是れを誦するを捨てしむるや？

師、云く、

しか、なり。

学人、最も百丈の規縄を守るべし。

然あるに、其の儀式は受戒、護戒、坐禅、等なり。

「昼夜に戒経を誦し、専ら、戒を護持す」と云うは、古人の行履に随いて、祇管打坐すべきなり。

坐禅の時、何れの戒か持たざる？！

何れの功徳か来らざる？！

古人、行じおける所の行履、皆、深き心なり。

私の意楽を存せずして、衆に随い、古人の行履に任せて、行じゆくべきなり。

第四章

ある時、示して云く、

仏照禅師の会下に一僧ありて、病患のとき、肉食を思う。照、是れを許して、食せしむ。

ある夜、自ら延寿堂に行きて見たまえば、灯火、幽にして、病僧、また、肉を食す。

時に、一鬼、病僧の頭の上にのり、いて、件の肉を食す。

僧は、「我が口に入る」と思えども、我は食せずして、頭上の鬼が食するなり。

然りし、より後は、病僧の肉食を好むをば、鬼に領せられたり、と知りて、是れを許しき、と。

是れについて思うに、

許すべきか？　許すべからざるか？　斟酌あるべし。

五祖演の会にも、肉食のこと、あり。

許すも、制するも、古人の心、皆、其の意趣あるべきなり。

第五章

一日、示して云く、

人、其の家に生れ、其の道に入らば、先ず、其の家業を修すべし、と知るべきなり。

我が道にあらず、己れが分にあらざらんことを知り、修するは、即ち、非なり。

今も出家人として、便ち、仏家に入り僧侶とならば、須らく、其の業を習うべし。

「其の業を習い、其の儀を守る」と云うは、我執をすてて、知識の教に随うなり。

其の大意は、貪欲、無きなり。

「貪欲、なからん」と思わば、先ず、須らく、吾我を離るべきなり。

吾我を離るるには、無常を観ずる、是れ、第一の用心なり。

世人、多く、「我は、もとより、人にも『よし』と云われ、思われん」と思うなり。

然あれども、よくも云われ、思われざるなり。

次第に、我執を捨て、知識の言に随いゆけば、精進するなり。

理をば、心得たる、ように云いて、「さは、さにあれども、我は、其の事を捨てえぬ」と云いて、執し、好み、修するは、弥よ、沈淪するなり。

禅僧の能くなる第一の用心は、只管打坐すべきなり。

利鈍、賢愚を論ぜず、坐禅すれば、自然に、よくなるなり。

第六章

示して云く、

広学、博覧は、かなうべからざることなり。

一向に、思い切りて、止むべし。

唯、一事について、用心、故実をも習い、先達の行履をも尋ねて、一行を専ら、はげみて、人師、先達の気色、すまじきなり。

第七章

或時、奘、問うて云く、
如何、是、不昧因果底、道理？
師の云く、
不動、因果なり。
云く、
なんとしてか脱落せん？
師の云く、
因果、歴然なり。
云く、
かくの如くならば、因、果を引起すや？
果、因を引起すや？
師の云く、
総て、かくの如くならば、かの、南泉の猫児を斬るがごとき、大衆、既に、道い得ず、便ち、猫児を斬郤しおわりぬ。
後に、趙州、頭に草鞋を戴きて出たりし、また、一段の儀式なり。
亦、云く、
我れ、若し、南泉なりせば、即ち、いうべし、「道い得たりとも、便ち、斬郤せん。
道い得ずとも、便ち、斬郤せん。
何人か猫児をあらそう？　何人か猫児を救う？」と。
大衆に代って、云わん、

「既に、道い得ず、和尚、猫児を斬郤せよ」と。

また、大衆に代って、云わん、

「和尚、只、一刀両段を知りて、一刀一段を知らず」と。

奘、云く、

「如何、是、一刀一段？」

師の云く、

猫児、是。

また、云く、

大衆、不対の時、我れ、南泉ならば、「大衆、既に道、不得」と云いて、便ち、猫児を放下してまじ。

古人の云く、

「大用、現前して軌則を存せず」と。

また、云く、

今の斬猫は、是れ、便ち、仏法の大用、現前なり。

或は、一転語なり。

若し、一転語にあらずば、「山河、大地、妙浄明心」と云うべからず。

また、「即心是仏」とも云うべからず。

便ち、此の一転語の言下にて「猫児、即、仏身」と見よ。

また、此の詞を聴いて、学人も、頓に、悟入すべし。

亦、云く、

此の「斬、猫児、即、是、仏、行」なり。

喚で何とか云うべき？

云く、

喚で「斬猫」と云うべし。

奘、云く、
是れ罪相なりや？　否や？
云く、
罪相なり。
奘、云く、
なにとしてか脱落せん？
云く、
別々無見なり。
云く、
別解脱戒とは、かくの如きを云うか？。
云く、
然り。
また、云く、
ただし、かくの如きの料簡、たとい、好事なりとも、無からんには、しかじ。

第八章

奘、問うて云く、

犯戒の語は受戒已後の所犯を云うか？

唯、また、未受以前の罪相をも犯戒と云うべきか？

如何？

師、答えて云く、

犯戒の名は受後の所犯を云うべし。

未受以前所作の罪相をば、只、罪相、罪業と云いて、犯戒と云うべからず。

問うて云く、

四十八軽戒の中に、「未受戒の所犯を『犯』と名く」と見ゆ。

如何？

答えて云く、

然らず。

彼は、未受戒の者、「今、受戒せん」とする時、所造のつみを懺悔するに、今の戒にのぞめて、前に十戒等を授かりて犯し、後ち、また、軽戒を犯ずるをも犯戒と云うなり。

以前所造の罪を犯戒と云うにはあらず。

第九章

問うて云く、

「今、受戒せん」とする時、「まえに造りし所の罪を懺悔せんが為に、未受戒の者に十重、四十八軽戒を教えて読誦せしむべし」と見えたり。

また、下の文に、「未受戒の前にして説戒すべからず」と。

此の二所の相違、如何？

答えて云く、

受戒と誦戒とは別なり。

懺悔のために戒経を誦するは、猶お、是れ、念経なり。

故に、「未受の者、戒経を誦せん」とす。

彼が為に戒経を説かんこと、咎あるべからず。

下の文に、利養の為のゆえに、未受戒の前にして、是れを説くことを制するなり。

今、受戒の者に懺悔せしめん為には、最も是れを教うべし。

第十章

問うて云く、
受戒の時は七逆の受戒を許さず。
先の戒の中には、「逆罪も懺悔すべし」と見ゆ。
如何？
答えて云く、
実に、懺悔すべし。
受戒の時、許さざることは、且く、抑止門とて抑ゆる義なり。
また、上の文は、破戒なりとも、還って、得受せば、清浄なるべし。
懺悔すれば、清浄なり、未受に同じからず。
問うて云く、
七逆、すでに、懺悔を許さば、また、受戒すべきか？
如何？
答えて云く、
然あり。
故、僧正、自ら所立の義なり。
既に、懺悔を許す、また、是れ、受戒すべし。
逆罪なりとも、くいて受戒せば、授くべし。
況や、菩薩は、たとい、自身は破戒の罪を受くとも、他の為には、受戒せしむべきなり。

第十一章

夜話に云く、

悪口を以て、僧を呵嘖し毀訾すること莫れ。

設(たと)い、悪人、不当なりとも、左右なく、悪(にく)み毀ること、なかれ。

先ず、いかに、「わるし」と云うとも、四人已上、集会しぬれば、これ、僧体にて、国の重宝なり。

最も帰敬すべきものなり。

若しは、住持、長老にてもあれ、若しは、師匠、知識にてもあれ、弟子、不当ならば、慈悲心、老婆心にて、教訓、誘引すべし。

其の時、設(たと)い、打つべきをば打ち、呵嘖すべきをば呵嘖すとも、毀訾、謗言の心を発すべからず。

先師、天童浄和尚、住持のとき、僧堂にて、衆僧、坐禅の時、眠りを誡しむるに、履を以て打ち謗言、呵嘖せしかども、衆僧、皆、打たるるを喜び讃歎しき。

有時、また、上堂の次でに云く、

我れ、既に、老後、今は、衆を辞し、菴に住して、老を扶けて居るべけれども、衆の知識として、各の迷を破り道を授けんがために住持人たり。

是に依りて、或は、呵嘖の詞を出し、竹篦、打擲、等のことを行ず。

是れ、頗る、怖れ、あり。

然あれども、仏に代って化儀を揚る式なり。

「諸の兄弟、慈悲を以て、是れを許し給え」と言えば、衆僧、皆、流涕しき。

此の如きの心を以てこそ、衆をも接し、化をも宣ぶべけれ。

住持、長老なればとて、乱（みだり）に、衆を領し、我が物に思いて、呵嘖するは、非なり。

況や、其の人にあらずして、人の短所を云い、他の非を謗るは、非なり。

よくよく用心すべきなり。

他の非を見て「悪しし」と思いて、「慈悲を以て化せん」と思わば、腹立つまじきように方便して、傍ら事を云うようにて、こしらうべきなり。

第十二章

また、物語に云く、

故鎌倉の右大将、初め、兵衛佐にて有りし時、内裡の辺に、一日、はれの会に出仕の時、一人の不当人ありき。

其の時の大納言、おおせて云く、

「是れを制すべし」と。

大将の云く、

「六波羅に仰せらるべし、平家の将軍なり」と。

大納言の云く、

「近か近かなればなり」と。

大将の云く、

「其の人に非ず」と。

是れ、美言なり。

此の心にて、後には、世をも治められしなり。

今の学人も、其の心、あるべし。

其人にあらずして、人を呵すること莫れ。

第十三章

夜話に云く、

昔、魯仲連と云う将軍ありき。

平原君が国に在て、よく朝敵をたいらぐ。

平原君、賞して、数多の金銀等を与えしかば、魯仲連、辞して、云く、「只だ、将軍のみちなれば、敵を能く討つのみなり、賞を得て、物をとらん為に非ず」と云いて、「敢て、取らず」と云う。

魯仲連が廉直とて名誉のことなり。

俗、猶お、賢なるは、我れ、其の人として其の道の能をなすばかりなり。

「かわりを得ん」とは思はず。

学人の用心も、かくの如くなるべし。

仏道に入り、仏法の為に諸事を行じて、「代りに所得あらん」と思うべからず。

内外の諸教に、皆、「無所得なれ」とのみ勧むるなり。

第十四章

法談の次でに示して云く、

設使（たとい）、我は、道理を以て云うに、人は、ひがみて僻事を云うを、理を攻めて云い勝つは、あしきなり。

また、我は、「現に道理」と思えども、「吾が非にこそ」と云いて、はやく、まけて、のくも、あしばやなり。

只、人も云い折らず、我が僻ごとにも謂わず、無為にして、止みぬるが、好（よ）きなり。

耳に聴入れぬようにして忘るれば、人も忘れて嗔らざるなり。

第一の用心なり。

第十五章

示して云く、

無常、迅速なり。

生死、事大なり。

且く、存命の際、業を修し、学を好まば、只、仏道を行じ、仏法を学すべきなり。

文筆、詩歌、等、其の詮なき事なれば、捨つべき道理なり。

仏法を学し、仏道を修するにも、猶お、多般を兼学すべからず。

況や、教家の顕密の聖教、一向に、さしおくべきなり。

仏祖の言語すら、多般を好み、学すべからず。

一事を専らにせんすら、鈍根、劣器の者は、かなうべからず。

況や、多事を兼て、心操をととのえざらんは、不可なり。

第十六章

示して云く、

むかし、智覚禅師と云いし人の発心、出家のこと。

此の師は、初めは、官人なり。

才幹に富み、正直の賢人なり。

国司たりし時、官銭をぬすみて施行す。

傍人、是れを帝に奏す。

帝、聞いて、大に驚怪す。

諸臣も、皆、あやしむ。

罪過、すでに、軽からず、「死罪に、おこなわるべし」と定まりぬ。

爰(ここ)に、帝、議して云く、

「此の臣は、才人なり、賢者なり。

今、ことさらに、此の罪を犯す。

若し、深き心あるか？

頸を截らんとき、悲み愁えたる気色あらば、速かに、截るべし。

若し、其の気色なくんば、定めて、深き心あらん、截るべからず」と。

勅使、引去て、截らんとする時、少しも愁うる気色なし、還って、喜ぶ気色あり。

自ら云く、

「今生の命は、一切、衆生に施す」と。

勅使、驚き怪みて、帝に奏聞す。

帝、云く、

「『然り、定めて、深き心、有らん、此の事、あるべし』と兼て是れを知る」と。

依りて、其の志を問う。

師の云く、

「『官を辞して、命を捨て、施を行じて、衆生に縁を結び、生を仏家に受て、一向に、仏道を行ぜん』と思う」と。

帝、是れを感じて、許して、出家せしむ。

故に、「延寿」と名を賜う。

殺すべきをとどむる故なり。

今の衲子も、是れほどの心を一度、発すべきなり。

「命を軽じ、衆生を憐れむ心、深くして、身を仏制に任せん」と思う心を発すべし。

若し、先より、此の心、一念も有らば、「失わじ」と保つべし。

是れほどの心、一度、おこさずして、仏法を悟ることは、有るべからざるなり。

第十七章

夜話に云く、

祖席に、禅話をこころえる故実は、我が本より知り思う心、次第々々に、知識の詞に随いて、改めもて行うなり。

仮令（たとえ）、仏と云うは、我が本より知りたりつるようは、相好、光明、具足し、説法、利生の徳ありし釈迦、弥陀、等を仏と知りたりとも、知識、若し、「仏と云うは、蝦蟆、蚯蚓ぞ」と云わば、蝦蟆、蚯蚓を「是ぞ、仏」と信じて、日比（ひごろ）の知、解を捨つべきなり。

此の蚯蚓の上に、仏の相好、光明、種々の仏の所具の徳を求むるも、猶お、情、見、あらたまらざるなり。

只、当時の見ゆる所を仏と知るなり。

若し、此の如く、詞に随いて、情、見、本執をあらためもて行かば、自ら契う所、あるべきなり。

然あるに、近代の学者、自らの情、見を執し、己見を本として、「仏とは、こうこそ、あるべけれ」と思い、また、吾が存ずるように差（たが）えば、「さは、あるまじい」なんどと云いて、「自らが情、量に似たることやあらん」と迷い、ありくほどに、大方、仏道の精進、なきなり。

また、「身を惜まずして、百尺の竿頭に上りて手足を放ちて一歩を進めよ」と云う時は、「命、ありてこそ、仏道も、学すべけれ」と云いて、真実に、知識に随順せざるなり。

よくよく思量すべきなり。

第十八章

夜話に云く、

世間の人も、衆事を兼学して、いずれも能く、せざらん、よりは、只、一事を能くして、人前にしても、しつべきほどに、学すべきなり。

況や、出世の仏法は、無始より以来、修習せざる法なり。

故に、今も、うとし。

我が性も、拙なし。

高広なる仏法に、ことの多般を兼ぬれば、一事をも成すべからず。

一事を専にせんすら、本性、昧、劣の根器、今生に、窮め難し。

努力、学人、一事を専らに、すべし。

奘、問うて云く、

若し、然らば、何ごと、いかなる行か、仏法に専ら好み修すすべき？

師の云く、

「機に随い、根に順うべし」といえども、今、祖席に相伝して専らする所は、坐禅なり。

此の行、能く、衆機を兼ね、上中下根、ひとしく、修し得べき法なり。

我れ、大宋、天童、先師の会下にして、此の道理を聞きて後ち、昼夜に定坐して、「極熱、極寒には発病しつべし」とて、諸僧、しばらく、放下しき。

我れ、其の時、自ら思わく、

設(たと)い、発病して死すべくとも、猶お、只、是れを修すべし。

病、無うして、修せず、此の身をいたわり用いて、なんの用ぞ？！

病して死せば、本意なり。

大宋国の善知識の会下にて、修し、死に、死して、よき僧に、さばくられたらんは、先ず、勝縁なり。

日本にて死せば、是れほどの人に、如法、仏家の儀式にて沙汰すべからず。

修行して、いまだ契悟せざらん先に死せば、結縁として生を仏家に受くべし。

修行せずして、身を久く持ちても、詮、無きなり。

なんの用ぞ?!

況や、「身を全うし、病、起らじ」と思わんほどに、知らず、また、海にも入り横死にも、あわん時は、後悔いかん?!

此の如く、案じつづけて、思い切りて、昼夜、端坐せしに、一切に、病、発らず。

今、各も、一向に、思いきりて、修して見よ。

十人は、十人ながら、得道すべきなり。

先師、天童の勧め、かくの如し。

第十九章

示して云く、

人は、思い切りて、命をも棄て、身肉、手足をも截ることは、中々、せらるるなり。

然あれば、世間の事を思うに、名利、執心の為にも、多く、かくの如く、思い切るなり。

只、依り来る時に、事に触れ、物に随いて、心品を調うること、難きなり。

学者、「身命を捨る」と思いて、且く、おししずめて、云うべきことをも、修すべきことをも、「道理に順ずるか？　順ぜざるか？」と案じて、道理に順ぜば、云い、若しは、行じも、すべきなり。

第二十章

示して云く、
学道の人、衣、糧を煩うこと莫れ。
只、仏制を守りて、世事を営むこと莫れ。
仏の言く、
衣服に糞掃衣あり、食に常乞食あり。
いずれの世にか、此の二事の尽ること有らん?!
無常、迅速なるを忘れて、徒らに、世事に煩うこと莫れ。
露命の、且く、存せる、あいだ、仏道を思いて、余事を事とする莫れ。

第二十一章

或人、問うて云く、

「名利の二道は、捨離し難し」といえども、行道の大なる礙りなれば、捨てずんば、あるべからず。

故に、是れを捨つ。

「衣、糧の二事は、小縁なり」といえども、行者の大事なり。

糞掃衣、常乞食は、是れ、上根の所行、また、是れ、西天の風流なり。

神丹の叢林には、常住物、等あり。

故に、其の煩い、無し。

我が国の寺院には、常住物、なし。

乞食の儀も、即ち、絶えて、伝わらず。

下根、不堪の身、いかがせん？

然あれば、予が如きは、檀信の信施を貪らんとするも、虚受の罪、随い来る。

田商士工を営むは、是れ、邪命食なり。

只、天運に任せん、とすれば、果報、亦、貧道なり。

飢、寒、来らん時、是れを愁いとして、行道を礙えつべし。

或人、諫めて、云く、

儞（なんじ）が行儀、はなはだし、時を知らず、機をかえり見ざるに似たり、下根なり、末世なり。

かくの如く修行せば、また、退転の因縁となりぬべし。

或は、一檀那をも相、かたらい、若しは、一外護をも、ちぎりて、閑居、静所にして、一身をたすけて、衣、糧に煩うこと無く、静に、仏道を行ずべし。

是れ、便ち、財物、等を貪るに非ず。
暫時の活計を具して修行すべし、と。
此の詞を聞くと云えども、いまだ信用せず。
かくの如きの用心、いかん？
答えて云く、
但、夫れ、衲子の行履、仏祖の家風を学ぶべし。
「三国、ことなり」といえども、真実、学道の者、いまだ此の如きの事あらず。
只、心を世事に執着すること莫れ。
一向に、道を学すべきなり。
仏の言く、
衣、鉢の外は、寸分も、貯えざれ。
乞食の余分は、飢えたる衆生に施せ。
設い、受け来るとも、寸分も、貯うべからず。
況や、馳走、あらんや？！
外典に云く、
「朝に、道を聞いて、夕に、死すとも、可なり」と。
設い、飢え死に、寒え死すとも、一日、一時なりとも、仏教に随うべし。
万劫、千生、幾回か生じ、幾度か死せん。
皆な、是れ、世縁、妄執の故なり。
今生、一度、仏制に随いて、餓死せん、是れ、永劫の安楽なるべし。
いかに、況や、未だ一大蔵教の中にも、三国、伝来の仏祖、一人も、飢え死にし、寒え死にしたる人、「あり」と、きかず。

世間、衣、糧の資具は、生得の命分ありて、求めに依ても来らず、求めざれども来らざるにも非ず。

只、任、運にして、心に挟むこと莫れ。

「末法なり」と謂うて、今生に、道心、発さずば、何れの生にか、得道せん？！

設い、空生迦葉の如くに、あらずとも、只、随分に、学道すべきなり。

外典に云く、

西施毛嬙にあらざれども、色を好む者は、色を好む。

飛兎緑耳にあらざれども、馬を好む者は、馬を好む。

龍肝鳳髄にあらざれども、味を好む者は、味を好む。

只、随分の賢を用いるのみなり。

俗、なお、此の儀、あり。

仏家、亦、かくの如く、なるべし。

況や、また、仏、二十年の福分を以て、末法の我らに施す。

是れに依て、天下の叢林、人天の供養、絶えず。

如来、神通の福徳、自在なるも、馬麦を食して、夏を過しましましき。

末法の弟子、豈に、是れを慕わざらんや？！

第二十二章

問うて云く、
破戒にして、虚しく人天の供養を受け、無道心にして、徒らに、如来の福分を費やさんより、在家人に随うて在家の事をなして、命ながらえて能く修道せんこと如何？

答えて云く、
誰が云いし、「破戒、無道心なれ」と？
只、強いて道心を発し、仏法を行ずべきなり。
いかに、況や、「持戒、破戒を論ぜず、初心、後心を分たず、斉しく、如来の福分を与う」とは、見えたれども、「破戒ならば、還俗すべし、無道心ならば修行せざれ」とは、見えず。
誰人か、初めより、道心ある？！
只、かくの如く、発し難きを発し、行じがたきを行ずれば、自然に、増進するなり。
人人、皆な、仏性あり。
徒らに、卑下すること莫れ。

また、文選に云く、
「一国、為、一人、興、
先賢、為、後愚、廃」と。
言う、こころは、国に、賢者、一人、出来れば、其の国、興る、
愚人、ひとり、出来れば、先賢のあと、廃るるなり。
是れを思うべし。

第二十三章

雑話の次でに云く、

世間の男女、老少、多く、交会、婬色、等の事を談ず。

是れを以て「心を慰むる」とし、興言とすること、あり。

一旦、意をも遊戯し、徒然も慰むるに似たり、と云うとも、僧は、もっとも禁断すべきことなり。

俗、猶お、よき人、まことしき人の、礼儀をも存じ、げにげにしき談の時、出来らざることなり。

只、乱酔、放逸なる時の談なり。

況や、僧は、専ら仏道を思うべし。

雑話は、希有、異体の乱僧の云うことなり。

宋土の寺院なんどには、都(すべ)て、雑談をせざれば、其のようなることをも云わざるなり。

吾が国も、近ごろ、建仁寺の僧正、存生の時は、一向、あからさまにも此の如きの言語、出来らず。

滅後にも、在世の時の門弟子、等、少々、残り、とどまりたりし時は、一切に、云わざりき。

近ごろ、此の七、八年より以来、今出の若き人たち、時々、談ずるなり。

存外の次第なり。

聖教の中にも、「麁、強、悪業、令、人、覚悟。

無、利、言説、能、障、正道」と、ありて、只、うち出して云う所の言ば、すら、「無、利」の言説は障道の因縁なり。

況や、かくの如きの言語は、ことばに引かれて、即ち、心も起りつべし。最も用心すべきなり。

故(ことさ)らに、「かくなん云わじ」と、せずとも、悪しきことと知りなば、漸々に、対治すべきなり。

第二十四章

夜話に云く、

世人、多く、善事を作す時は、人に知られんと思い、悪事を作す時は、人に知れじと思うに依りて、此の心、冥衆の心に合わざるに依りて、所作の善事には感応なく、密に作す所の悪事には罰、あるなり。

是れによりて、還って、自ら謂く、「善事には、験（しるし）、なし。仏法の利益、すくなし」と思えるなり。

是れ、即ち、邪見なり。

最も、改むべし。

人も知らざる時に密に善事をなし、悪事を錯りて後には発露して、とがを悔ゆ。

かくの如くすれば、便ち、密密に、なす所の善事には感応あり、露（あらわ）るる悪事は懺悔せられて罪、滅する故に、自然に、現益も、あるなり。

当果をも、亦、知るべし。

第二十五章

爰(ここ)に、ある在家人、来りて問うて云く、

「近代、在家人、衆僧を供養し、仏法を帰敬するに、多く、不吉のこと出来るに依りて、邪見、起り、『三宝に帰せじ』と思う、いかん?」と。

答えて云く、

是れは、衆僧、仏法の咎には、あらず、便ち、在家人、自らの錯なり。

其の故は、仮令(たとえ)、人目ばかりに、持戒、持斎の僧をば貴び供養し、破戒、無慚の飲酒、食肉、等するをば「不当なり」と思うて供養せず。

此の差別の心、実に、仏意に、そむけり。

故に、帰敬の功も、むなしく、感応も、なきなり。

戒の中にも、所々に、此の心を誡めたり。

僧ならば、徳の有無を択(えら)ばず、只、供養すべきなり。

殊に、其の外相を以て、内徳の有無を決定すべからず。

末世の比丘、いささか、外相、尋常ならぬ所、見ゆれども、また、是れに、まされる悪心も悪事も、あるなり。

然る間、よき僧、あしき僧を差別し思うこと無うして、仏弟子なれば貴びて平等の心にて供養、帰敬もせば、必ず、仏意に契うて、利益も、ひろかるべし。

また、冥機、冥応、顕機、顕応、等の四句あることを思うべし。

また、現生、後報、等の三時業のことも、あり。

是れらの道理、能く能く、学すべきなり。

第二十六章

夜話に云く、

若し、人、来りて、用事を云う中に、或は、人に、ものをこい、或は、訴訟、等のことをも云わんとて、一通の状をも所望すること出来ること有らんに、其の時、我は非人なり、遁世、籠居の身なれば、在家、等の人に非分のことを云わんは、非なり、とて、眼前の人の所望をかなえずば、実に、非人の法には、似たれども、其の心中をさぐるに、猶お、我れは遁世、非人なり、非分のことを人に云わば、人、定めて、わるく思いけんと云う道理を思うて、聴かずんば、なお、是れ、我執、名聞なり。

只、其の時に望んで、よくよく、思量して、眼前の人の為に一分の利益となるべき事をば、人の、あしく思わんことをも顧みず、なすべきなり。

此のこと、非分なり、わるし、とて、疎みもし、中をも、たがわんも、かくの如くの不覚の知音、中、たがわん事、何か、苦るしかるべき。

外には、非分の僻事をすると、人には、見ゆるとも、内にも、我執を破り、名聞を捨つる、第一の用心なり。

仏、菩薩は、人の来りて請うときは、身肉、手足をも截れり。

況や、人、来りて、一通の状をこわんに、名聞、計りを思うて、其の事を聞かぬは、是れ、我執、深きなり。

「人々、ひじり、ならず、非分の事を云う人かな」と所詮なく思うとも、我は名聞をすてて、一分の人の利益とならば、真実の道に相応すべきなり。

古人も、其の義、あるかと見ゆること多し。

我れも、其の義を思うて、少々、檀那、知音の思いかけざる事を人に申し伝えて給われと云う事をば、文、一通、遣りて、一分の利益を作るは、易きことなり。

奘、問うて云く、

此の事、実に、然り。

ただし、善事にて人の利益とならんことを人にも云い伝えんは最ともなるべし。

若し、僻事を以て人の所帯を取らんと思い、或は、人の為に、あしき事を云わんをば、云い伝うべきや？

如何？

師、曰く、

理、非、等のことは、我が知るべきに非ず。

只、一通の状を乞えば、与うれども、理、非に任せて沙汰あるべき由をこそ、人にも云い、状にも載すべけれ。

請け取りて沙汰せん人こそ理、非をば明らむべけれ。

吾が分上に、あらぬ、此の如きのことを、理を枉(ま)げて、その人に云わんことも、亦、非なり。

亦、現の僻事なれども、我を大事にも思う人にて、此の人の云わんことは、善悪、たがえじ、と思うほどの知音ありて、檀那の所へ、ひがことを以て不得心の所望をなさば、其れを只今その人より所望のことを一往、聞くとも、彼の状には、去り難く申せば、申すばかりなり。道理に任せて沙汰あるべし、と書くべきなり。

一切に、是、なれば、彼れも是れも、遺恨、あるべからざるなり。

此の如くのこと、人に対面をもし出来ることにつきて、よくよく、思量すべきなり。

所詮は、事に触れて、名聞、我執を捨つべきなり。

第二十七章

夜話に云く、

今、世、出世間の人、多分は、善事をなしては、かまえて、「人に知られん」と思い、悪事を作しては、「人に知られじ」と思う。

是に依りて、内外、不相応のこと、出来たる。

あい、かまえて、内外、相応し、錯りを悔い、実徳をかくして、外相をかざらず、好事をば他人にゆずり、悪事をば己れに、むかうる志気、あるべきなり。

問うて云く、

実徳を蔵し、外相を飾らざらんこと、実に、然るべし。

但し、仏、菩薩は、大悲、利生を以て、本とす。

無智の道俗等、外相の不善を見て、是れを謗り難ぜば、謗僧の罪を感ぜん。

実徳を知らずとも、外相を見て、貴び、供養せば、一分の福分たるべし。

是れらの斟酌、いかなるべきぞ？

答えて云く、

外相を飾らず、とて、即ち、放逸ならば、また、是れ、道理に差う。

「実徳を蔵す」と云いて、在家、等の前にて悪行を現ぜん、亦、是れ、破戒の甚だしきなり。

只、希有の道心者、「道心の由を人に知られん」と思い、「身にある失を人に知られじ」と思えども、諸、天、善神、及び、三宝の冥に知見する所なり。

夫をば、愧じずして、「世人に貴びられん」と思う意を誡むるなり。

只、時にのぞみ、事に触れて、興法の為め、利生の為に、諸事を斟酌すべきなり。

擬して後に云い、思いて後に行じて、卒暴なること莫れ、となり。

一切のことに、のぞんで、道理を案ずべきなり。

念々、止まらず、日々、遷流して、無常、迅速なること、眼前の道理なり。

知識、経巻の教を待つべからず。

只、念々に、明日を期することなく、当日、当時ばかりを思うて、後日は太(はなは)だ不定なり、知り難ければ、只、今日ばかり、存命のほど、仏道に随わん、と思うべきなり。

「仏道に随う」と云うは、興法、利生の為に、身命を捨てて、諸事を行じもてゆくなり。

第二十八章

問うて曰く、
仏教のすすめに随わば、乞食、等を行ずべきか？
如何？
答う、
然、あるべし。
ただし、是れは、土風に随いて斟酌あるべし。
なににても、利生も広く、我が行も、すすまん、かたに、つくべきなり。
是れらの作法、道路、不浄にして、仏衣を着して、経行せば、けがれつべし。
また、人民、貧窮にして、次第、乞食も、かなうべからず、行道も退きつべく、利益も広からざらんか。
只、土風をまもり、尋常に、仏道を行じ居たらば、上下の輩がら、自ら、供養を作し、自行、化他、成就せん。
此の如きの事も、時に望み、事に触れて、道理を思量して、人目を思わず、自らの益を忘れて、仏道、利生の為に、よきように計らうべし。

第二十九章

示して云く、

学道の人、世情を捨つべきについて、重々の用心あるべし。

世をすて、家をすて、身をすて、心を捨つるなり。

よくよく、思量すべきなり。

世を遁れて、山林に隠居すれども、吾が重代の家を絶やさず、家門、親族のことを思うも、あり。

また、世をも、のがれ、家をも、すてて、親族、境界をも遠離すれども、我が身を思いて、苦しからんことをば、せじ、病い起るべからん事は仏道なりとも行ぜじ、と思うも、いまだ身を捨てざるなり。

また、身をも惜まず、難行、苦行すれども、心、仏道に入らずして、我が心に差うことをば、仏道なれども、せじ、と思うは、心を捨てざるなり。

正法眼蔵随聞記 第二

侍者 懐奘 編

第二巻

第三十章

示して云く、

行者、先ず、心をだにも調伏しつれば、身をも、世をも捨つることは、易きなり。

只、言語につけ、行儀につけて、人目を思いて、此の事は悪事なれば、人、あしく思うべし、とて、なさず、我れ、此の事をせんこそ仏法者と人は見ん、とて、事に触れて、善きことをせん、とするも、猶お、世情なり。

然あればとて、また、恣(ほしい)ままに、我が心に任せて悪事をするは、一向の悪人なり。

所詮、悪心を忘れ、我が身を忘れて、只、一向に、仏法の為に、すべきなり。向い来らん、ごとに、随いて、用心すべきなり。

初心の行者は、先ず、世情なりとも、人情なりとも、悪事をば心に制し、善事をば身に行ずるが、便ち、身心を捨つるにて有るなり。

第三十一章

示して云く、故僧正、建仁寺におわせし時、ひとりの貧人、来りて云く、

「我が家、貧うして、絶煙、数日に、およぶ。

夫婦、子息、両、三人、餓死しなんとす。

慈悲を以て、是れを救い給え」と云う。

其の時、房中に、都(すべ)て、衣食、財物、等、なし。

思慮をめぐらすに、計略、つきぬ。

時に、薬師の像を造らん、とて、光の料に打ちのべたる銅、少分、ありき。

是れを取りて、自ら、打、おり、束ね、まるめて、彼の貧客にあたえて云く、

「是れを以て、食物にかえて、餓をふさぐべし」と。

彼の俗、よろこんで、退出しぬ。

時に、門弟子、等、難じて、云く、

正(まさ)しく、是れ、仏像の光なり。

これを以て俗人に与う。

仏物己用の罪、如何？

僧正の云く、

誠に、然り。

但し、仏意を思うに、仏は身肉、手足を割きて衆生に施せり。

現に、餓死すべき衆生には、設(たと)い、仏の全体を以て与うるとも、仏意に合(かな)うべし。

また、云く、

「我れは、此の罪に依りて悪趣に堕すべくとも、只、衆生の飢えを救うべし」と云々。

先達の心中のたけ、今の学人も、思うべし。

忘るること莫れ。

第三十二章

また、ある時、僧正の門弟の僧、等の云く、

「今の建仁寺の寺屋敷、川原に近し。

後代に、水難、ありぬべし」と。

僧正の云く、

「我れ、寺の後代の亡失、是れを思うべからず。

西天の祇園精舎も、いしずえ、ばかり、とどまれり。

然あれども、寺院、建立の功徳、失すべからず。

また、当時、一年、半年の行道、其の功徳、莫大なるべし」と。

今、是れを思うに、寺院の建立、実に、一期の大事なれば、未来際をも兼ねて、難、無きようにと、こそ、思うべけれども、さる心中にも亦、此の如きの道理、存せられたる心のたけ、実に、是れを思うべし。

第三十三章

夜話に云く、

唐の太宗の時、魏徴、奏して云く、

「土民、等、帝を謗すること、あり」と。

帝、云く、

「寡人、仁、ありて、人に謗せられれば、愁と、すべからず、仁、無うして、人に讃せられれば、是れを愁うべし」と。

俗、猶お、かくの如し。

僧は、最も、此の心、あるべし。

慈悲あり、道心ありて、愚痴人に誹謗せられんは、苦しかるべからず、無道心にて、人に有道と思われん、是れをよくよく、つつしむべし。

第三十四章

また、示して云く、

隋の文帝の云く、

密々に、徳を修して、飽けるをまつ。

言う心は、よき道徳を修して、あけるをまちて、民をいつくしうすると、なり。

僧、猶お、是れに及ばずんば、もっとも用心すべきなり。

只、内に道業を修すれば、自然に、道徳、外に、あらわれて、人に知られんことを期せず、のぞまずして、只、もっぱら、仏教に、したがい、祖道に随いゆけば、人、自ずから、道徳に帰するなり。

ここに、学人の錯り出で来るようは、人に、たっとばれ、財宝、いで来るを以て、道徳の、あらわれたると、自からも思い、人も、知り思うなり。

是れ、即ち、天魔波旬のつきたると、心に、しりて、最も思量すべし。

教の中に、是れは、魔の所為、と云うなり。

いまだ聞かず、三国の例、財宝に、とみ、愚人の帰敬をもって道徳とすべきことを。

道心者と云うは、昔より、三国みな、貧にして、身をくるしくし、一切を省約して、慈あり、道あるを、まことの行者と云うなり。

徳の、あらわるる、と云うも、財宝に、ゆたかに、供養に、ほこるを云うに、あらず。

徳の顕わるるに、三重、あるべし。

先ずは、其の人、其の道を修むるなり、と知らるるなり。

次には、其の道を慕う者、いで来る。
後には、其の道をおなじく学し、同じく行ずる。
是れを道徳の、あらわるる、と云うなり。

第三十五章

夜話に云く、

学道の人は、人情を棄つべきなり。

人情をすつる、と云うは、仏法に随い行くなり。

世人、おおく、小乗 根性にて、善悪をわきまえ、是非を分ちて、是をとり、非をすつるは、みな、是れ、小乗 根性なり。

只、先ず、世情をすてて、仏道に入るべし。

仏道に入るには、我がこころに、善悪を分けて、よしと思い、あししと思うことをすてて、我が身よからん、我が意なにとあらんと思う心をわすれて、善くもあれ、悪くもあれ、仏祖の言語、行履に随いゆくなり。

吾が心に善しと思い、また、世人の、よしと思うこと、必ずしも善からず。

然あれば、人めも、わすれ、吾が意をも、すてて、仏教に随いゆくなり。

身も、くるしく、心も愁うるとも、我が身心をば、一向に、すてたるものなれば、と思うて、苦しく、うれえつべきこと、なりとも、仏祖、先徳の行履ならば、なすべきなり。

此の事は、よきこと、仏道に、かないたらめ、と思うて、なしたく、行じたくとも、もし、仏祖の行履に無からん事は、なすべからず。

是れ、必ず、法門をも、よく、こころえたるにて、あるなり。

吾が心にも、また、本より、習い来る法門の思量をば棄てて、只今、見る所の祖師の言語、行履に、次第に、心を移しもてゆくなり。

かくのごとくすれば、智慧も、すすみ、悟りも開くるなり。

本より、学せし所の教家、文字の功も、すつべき道理あらば、棄てて、今の義につきて見るべきなり。

法門を学する事は、本より、出離、得道のためなり。

「我が所学、多年の功つめり、なんぞ、たやすく捨てん?」と、猶お、心深く思う、即、此の心を「生死繋縛の心」と云うなり。

能々(よくよく)、思量すべし。

第三十六章

夜話に云く、

故 建仁寺 僧正の伝をば、顕兼 中納言 入道の、書かれたるなり。

其の時、辞する、ことばに云く、

儒者に書かせらるべきなり。

そのゆえは、儒者は、もとより、身をわすれて、幼き時より、長となるまで、学問を本とす。

故に、かき出したるものに誤まり無きなり。

直(ただ)の人は、身の出仕、交衆を本として、かたわらごとに、学問をする、あいだ、自ら、好人、あれども、文筆のみちにも誤り出で来るなり、と。

是れを思うに、昔の人は、外典の学問も、身をわすれて、学するなり。

第三十七章

また、云く、

故公胤僧正の云く、

道心と云うは、一念三千の法門なんどを、胸の中に学し入れて、もちたるを道心と云うなり。

なにと無く、笠を頸に懸けて、迷い、ありくをば、天狗、魔縁の行と云うなり。

第三十八章

夜話に云く、

故僧正の云く、

衆僧、各、所用の衣、糧、等の事、予が、あたうると思うこと、なかれ。

皆、是れ、諸天の供する所なり。

吾は、取り次ぎ、人にあたえたるばかりなり。

また、各、一期の命分、具足す。

奔走すること莫れ。

吾が恩と思うこと莫れ、と常に、すすめられける。

是れ、第一の美言と、おぼゆるなり。

第三十九章

また、大宋、宏智禅師の会下、天童は、常住物、千人の用途なり。
然あれば、堂中、七百人、堂外、三百人にて、千人につもる、常住物なるに、
好き長老の住したる故に、諸方の僧、雲集して、堂中、千人なり。
其の外に、五、六百人あるなり。
知事の人、宏智に訴えて云く、
常住物は、千人の分なり。
衆僧、多く集まりて、用途、不足なり、枉(ま)げて、はなたれん、と申ししかば、
宏智、云く、
人々、みな、口あり。
汝が、事に、あずからず。
歎くこと莫れ、と云々。
今、是れを思うに、人々、皆、生得の衣食あり。
思念によりても出で来らず、求めざれば来らざるにもあらず。
在家人すら、なお、運に任かせて、忠を思い、孝を学す。
いかに、況や、出家人は、すべて、他事を管せんや?!
釈尊、遺付の福分あり、諸天、応供の衣食あり、また、天然、生得の命分あり。
求めず、思わずとも、任運に命分あるべきなり。
直(た)と饒い、走り求めて、宝をもちたりとも、無常、忽ちに来らん時、如何?
故に、学人は、只、須からく、余事を心に、とどめず、一向に、学道すべきなり。

第四十章

また、ある人の云く、

末世、辺土の仏法興隆は、閑居、静所をかまえ、衣食、等の外護に、わずらい、なく、衣食、具足して、仏法修行せば、利益も広かるべし、と。

今、これを思うに、然らず。

それに附ては、有相著我の諸人あつまり学せんほどに、その中には、一人も、発心の人は出来るまじ。

利養につき、財欲にふけりて、縦(たと)い、千万人、集りたらんも、一人、無からんに、猶、おとるべし。

悪道の業因のみ、自ら、積みて、仏法の気分なきゆえなり。

もし、清貧、艱難にして、或は、乞食し、あるいは、果蓏、等を食して、常に飢饉にして学道せんに、是れを聞いて、若し、一人も、来り学せんと思う人、あらんこそ、誠の道心者、仏法興隆ならめと、おぼゆれ。

艱難、清貧によりて、もし、一人も、なからんと、衣食、ゆたかにして、諸人、あつまりて、仏法の無からんとは、只、八両と半斤となり。

第四十一章

亦、云く、

当世の人、多く、造像、起塔、等の事を仏法興隆と思えり。

是れ、また、非なり。

直饒(たと)い、高堂、大観玉をみがき、金をのべたりとも、是れに依りて、得道の者、あるべからず。

只、在家人の財宝を仏界に入れて、善事をなす、福分なり。

また、小因大果を感ずることあれども、僧徒の、此の事をいとなむは、仏法興隆には、あらざるなり。

たとい、草菴、樹下にてもあれ、法門の一句をも思量し、一(ひ)と時の坐禅をも行ぜんこそ、誠の仏法興隆にてあらめ。

今、僧堂を立てんとて、勧進をもし、随分に、いとなむ事は、必ずしも仏法興隆と思わず。

ただ、当時、学道する人もなく、いたずらに、日月を送る、あいだ、ただ、あらん、よりは、と思うて、迷徒の結縁とも、なれかし、また、当時、学道の徒(とも)がらの坐禅の道場のためなり、また、思い始めたる事のならぬとても恨み、あるべからず。

ただ、柱、一本なりとも、立てて置きたらば、後来も、かく思い、くわだてたれども、成らざりけり、と見んも、苦しかるべからず、と思うなり。

第四十二章

また、ある人、勧めて云く、
仏法興隆のために、関東に下向すべし、と。
答えて云く、
然らず。
若し、仏法に志あらば、山川、江海を渡りても、来りて学すべし。
其の志、無からん人に、往き向うて勧むるとも、聞き入れんこと、不定なり。
ただ、我が資縁のために、人を誑惑せんか？
また、財宝を貪らんがためか？
其れは、身の苦しみなれば、いかでもありなんと覚ゆるなり。

第四十三章

また、云く、

学道の人、教家の書籍をよみ、外典、等を学すべからず。

見るべくんば、語録、等を見るべし。

其の余は、しばらく、是れを置くべし。

近代の禅僧、頌を作り、法語を書かんがために、文筆、等をこのむ。

是れ、便ち、非なり。

頌に、つくらずとも、心に思わんことを書出し、文筆、ととのわずとも、法門をかくべきなり。

是れをわるしとて見ざらんほどの無道心の人は、よく文筆を調(ととの)えて、いみじき秀句、ありとも、ただ、言語ばかりを玩(もて)あそんで、理を得べからず。

我れ、もと、幼少の時より、好み学せしことなれば、今も、ややもすれば、外典、等の美言、案ぜられ、文選、等も見らるるを、詮なき事と存ずれば、一向に、すつべき由を思うなり。

第四十四章

一日、示して云く、
吾れ在宋の時、禅院にして古人の語録を見し時、ある西川の僧、道者にて、ありしが、我に問うて云く、
語録を見て、なにの用ぞ？
答えて云く、
古人の行李を知らん。
僧の云く、
何の用ぞ？
云く、
郷里にかえりて、人を化せん。
僧の云く、
なにの用ぞ？
云く、
利、生のためなり。
僧の云く、
「畢竟じて、何の用ぞ？」と。
予、後に、此の理を案ずるに、語録、公案、等を見て、古人の行履をも知り、あるいは、迷者のために説き聴かしめん、皆な、是れ、自行、化他のために畢竟じて無用なり。
只管打坐して大事をあきらめなば、後には、一字を知らずとも、他に開示せんに、用い、つくすべからず。

故に、彼の僧、「畢竟じて、なにの用ぞ?」とは云いける。

是れ、「真実の道理なり」と思いて、其の後、語録、等を見ることをやめて、一向に、打坐して、大事を明らめ得たり。

第四十五章

夜話に云く、

真実、内徳、のうして、人に貴びらるべからず。

此の国の人は、真実の内徳をば知らずして、外相を以て、人を貴とぶほどに、無道心の学人は、即ち、悪道にひきおとされて、魔の眷属と、なるなり。

人に貴とびられんは、安き事なり。

中々、身を捨て、世をそむく由を以てなすは、外相ばかりの仮令（けりょう）なり。

只、なにともなく世間の人の様にて内心を調えもてゆくが、是れ、実の道心者なり。

然あれば、古人の云く、「内、空しうして、外、したがう」と。

云う心は、内心は我心、のうして、外相は他に随いもてゆくなり。

我が身、我が心と云う事を一向に忘れて仏法に入りて、仏法のおきてに任せて行じもてゆけば、内外、ともに、よく、今も後も、よきなり。

仏法の中にも、そぞろに身をすて、世をすつればとて、棄つべからざる事をすつるは、非なり。

此の土の仏法者、道心者を立つる人の中にも、身をすつるとて、人は、いかにも見よ、と思いて、ゆえ無く、身をわるく、ふるまい、或は、また、世を執せぬ、とて、雨にも、ぬれながら行き、なんど、するは、内外、ともに、無益なるを、世間の人は、すなわち、此らを、「貴き人かな。世を執せぬ」なんどと思えるなり。

中に仏制を守りて、戒律の儀をも存じ、自行、化他、仏制にまかせて行ずるをば、かえりて、名聞、利養げなるとて、人も管せざるなり。

夫れが、却て、吾がためには、仏教にも随い、内外の徳も成ずるなり。

第四十六章

夜話に云く、

学道の人、世間の人に、智者、もの知りと、しられては、無用なり。

真実、求道の人の、一人もあらん時は、我が知る所の仏祖の法を説かざること、あるべからず。

直饒（たと）い、我を殺さんとしたる人なりとも、真実の道を聴かんとて、誠の心を以て問わば、怨心をわすれて、是れが為に説くべきなり。

其の外、教家の顕密、及び、内外の典籍、等の事、知りたる気色しては、全く無用なり。

人、来りて、此の如きの事を問わば、「知らず」と答えたらんに、一切に、苦しかるべからざるなり。

其れを、「もの知らぬは、わるし」と、人も思い、「愚人」と自らも覚ゆる事を傷（いた）んで、ものを知らんとて、博く内外典を学し、剰（あま）つさえ、「世間、世俗の事をも知らん」と思いて、諸事を好み学し、あるいは、人にも知りたる由をもて、なすは、究めて僻事なり。

学道のために真実に無用なり。

知りたるを知らざる気色するも、むずかしく、ようがましければ、却て、あたる気色にて、あしきなり。

もとより、知らざらんは、苦しからざることなり。

我れ、幼少の時、外典、等を好み学しき。

夫が、のち、入宋、伝法するまでも、内外の書籍を開き、方語を通ずるまでも、大切の用事、また、世間のためにも、尋常ならざる事なり。

俗、なんども、尋常ならざる事に思いたる、かたがたの用事にて、ありけれども、今、熟ら（つらつ）、思うに、学道の、さわりにて、あるなり。

只、聖教を見るとも、文に見ゆる所の理を、次第に、心得てゆかば、其の道理を得つべきなり。

然るに、先ず、文章を見、対句、韻声、なんどを見、「よきぞ」、「あしきぞ」と心に思うて、後に、理をば心得るなり。

然あれば、中々、知らずして、初めより、道理を心得て行かば、よかるべきなり。

法語、等を書くにも、文章に、おおせて、書かんとし、韻声、差（たが）えば、礙（さ）えられなんどするは、知りたる咎なり。

語言、文章は、いかにもあれ、思う儘（まま）の理を顆々と書きたらんは、後来も、「文は、わろし」と思うとも、理だにも聞えたらば、道のためには大切なり。

余の才学も、かくの如し。

伝え聞く、

故高野の空阿弥陀仏は、本は、顕密の碩徳なりき。

遁世ののち、念仏の門に入りて後に、真言師ありて、来て、密宗の法門を問いけるに、彼の人、答えて云く、「皆、わすれ、おわりぬ。一字も、おぼえず」とて答えられざりけるなり。

これらこそ、道心の手本となるべけれ。

などかは、少々、覚えでは、あるべき。

然あれども、無用なる事をば云わざりけるなり。

一向、念仏の日は、さこそ、有るべけれ、と覚ゆるなり。

今の学者も、此の心、あるべし。

縦（たと）い、もと、教家の才学、等、ありとも、皆、忘れたらんは、好（よき）事なり。

況や、今、学すること、努々（ゆめゆめ）、あるべからず。

宗門の語録、等、なお、真実、参学の道者は、見るべからず。

其の余は、是れを以て、知るべし。

第四十七章

夜話に云く、

今、此の国の人は、多分、或は、行儀につけ、或は、言語につけ、善悪、是非、世人の見聞知識を思いて、其の事をなさば、人、悪しく思いてん、其の事は、人、善しと思いてんと、乃至、向後までをも執するなり。是れ、全く、非なり。

世間の人、必ずしも、善とすること、あたわず。

人は、いかにも思わば思え、狂人とも云え、我が心に仏道に順じたらんことをば、なし、仏法に順ぜずんば行ぜずして、一期をも過さば、世間の人は、いかに思うとも、苦しかるべからず。

遁世と云うは、世人の情を心にかけざるなり。

ただ、仏祖の行履、菩薩の慈悲を学して、諸、天、善神の冥に照す所を慚愧して、仏制に任せて行じもてゆかば、一切、苦しかるまじきなり。

さればとて、また、人の悪ししと思い云わんも苦しかるべからずとて、放逸にして悪事を行じて人を愧じざるは、是れ、亦、非なり。

ただ、人目には、よらずして、一向に、仏法に依りて行ずべきなり。

仏法の中には、また、然(か)くのごときの放逸、無慚をば制するなり。

第四十八章

また、云く、

世俗の礼にも、人の見ざる所、或は、暗室の中なれども、衣服、等をきがうる時も、また、坐、臥する時にも、放逸に、隠所なんどをも蔵（かく）さず無礼なるをば、天に慚じず、鬼に慚じず、とて、そしるなり。

只、人の見る時と同じく、かくすべき所をも、かくし、はずべきことをも、はずるなり。

仏法の中も、また、戒律、かくのごとし。

然あれば、道者は、内外を論ぜず、明暗を択（えら）ばず、仏制を心に存して、人の見ず、知らざれば、とて、悪事を行ずべからざるなり。

第四十九章

一日、学人、問うて云く、
某甲、なお、学道を心にかけて、年月を経るといえども、いまだ、省悟の分、あらず。
古人、多く、道は聡明、霊利に依らず、有智、明敏を用いず、と云う。
然あれば、我が身、下根、劣器なれば、とて、卑下すべきにも、あらず、と、きこえたり。
若し、故実、用心を存すべき様ありや？
如何？
示して云く、
然、あり。
有智、高才を用いず、霊利、聡明によらぬは、まことの学道なり。
あやまりて盲、聾、痴人のごとくに、なれ、と、すすむるは、非なり。
学道は、是れ、全く、多聞、高才を用いぬ故に、下根、劣器、と嫌うべからず。
誠の学道は、やすかるべきなり。
然あれども、大宋国の叢林にも、一師の会下の数百、千人の中に、まことの得道、得法の人は、わずかに、一人、二人なり。
然あれば、故実、用心も、あるべきなり。
今、是れを案ずるに、志の至ると、至らざると、なり。
真実の志を発して、随分に参学する人、「得ず」と云うこと、なきなり。

その用心の様は、何事を専らにし、その行を急にすべし、と云うことは、次のこと、なり。

先ず、欣求の志の切なるべきなり。

譬(たと)えば、重き宝をぬすまん、と思い、強き敵をうたん、と思い、高き色に、あわん、と思う心、あらん人は、行住坐臥、ことにふれ、おりに随いて、種々の事は、かわり来るとも、其れに随いて、隙を求め、心に懸くるなり。この心、あながちに切なるもの、「とげず」と云うこと、なきなり。かくの如く、道を求むる志、切になりなば、或は、只管打坐の時、或は、古人の公案に向わん時、若しくは、知識に逢わん時、実の志を以て行ずる時、高くとも射つべく、深くとも釣りぬべし。

是れほどの心、発らずして、仏道の一念に、生死の輪廻をきる大事をば、如何が、成ぜん？！

若し、此の心、あらん人は、下智、劣根をも云わず、愚痴、悪人をも論ぜず、必ず、悟りを得べきなり。

また、此の志をおこす事は、切に、世間の無常を思うべきなり。

此の事は、また、只、仮令(けりょう)の観法なんどに、すべきことに、あらず。

また、無きことをつくりて、思うべきことにも、あらず。

真実に、眼前の道理なり。

人のおしえ、聖教の文、証道の理を待つべからず。

朝に、生じて、夕べに、死し、昨日、みし人、今日は、なきこと、眼に遮ぎり、耳に、ちかし。

是れは、他のうえにて、見聞することなり。

我が身にひきあてて道理を思うに、たとい、七旬、八旬に、命を期すべくとも、終に、死ぬべき道理に依りて、死す。

其の間の、憂い、楽しみ、恩愛、怨敵、等を思いとげば、いかにでも、すごしてん。

只、仏道を信じて、涅槃の真楽を求むべし。

況や、年長、大せる人、半ばに過ぬる人は、余年、幾く（いくば）、計りなれば、学道、ゆるくすべきや？！

此の道理も、なお、のびたる事なり。

真実には、今日、今時こそ、かくのごとく、世間の事をも、仏道の事をも、思え、今夜、明日より、いかなる重病をも受けて、東西をも弁えぬ重苦の身と、なり、また、いかなる鬼神の怨害をも、うけて、頓死をも、し、いかなる賊難にも、あい、怨敵も出来て、殺害、奪命せらるることもや、あらんずらん。

実に、不定なり。

然あれば、是れほどに、あだなる世に、極て不定なる死期をいつまで命ながらうべきとて、種々の活計を案じ、剰（あまつ）さえ、他人のために悪をたくみ思いて、いたずらに、時光を過すこと、極めて、おろかなる事なり。

此の道理、真実なればこそ、仏も、是れを、衆生の為に説きたまい、祖師の普説、法語にも、此の道理のみを説かる。

今の上堂、請益、等にも、「無常、迅速。生死、事大」と云うなり。

返す返すも、此の道理を心にわすれずして、只、今日、今時ばかり、と思うて、時光をうしなわず、学道に心をいるべきなり。

其の後は、真実に、やすきなり。

性の上下と、根の利鈍は、全く、論ずべからざるなり。

第五十章

夜話に云く、

人、多く、遁世せざることは、我が身をむさぼるに似て、我が身を思わざるなり。

是れ、便ち、遠慮、なきなり。

また、是れ、善知識に、あわざるに依りてなり。

たとい、利養を思うとも、常楽の益を得て、龍、天の供養を得んことを願い、名聞を思うとも、仏祖の名を得、古徳の名を得ば、後賢も、是れを聞いては、慕うべきなり。

第五十一章

夜話に云く、

「朝に、道を聞いて、夕べに、死すとも、可なり」と。

いま、学道の人も、此の心、あるべきなり。

曠劫、多生の間、いくたびか、徒らに、生じ、徒らに、死せしに、まれに、人身を受けて、たまたま、仏法にあえる時、此の身を度せずんば、何れの生にか、此の身を度せん？

縦(たと)い、身を惜み、たもちたりとも、かなうべからず。

ついに、捨てて行く、いのちを、一日、片時なりとも、仏法のために捨てたらんは、永劫の楽因なるべし。

後のこと、明日の活計を思うて、棄つべき世を捨てず、行ずべき道を行ぜずして、徒らに、日夜を過すは、口惜しきことなり。

只、思いきりて、明日の活計なくば、飢え死にもせよ、寒え死にもせよ、今日、一日、道を聞いて、仏意に随いて死せんと思う心を、まず、発すべきなり。

然るときんば、道を行じ得んこと、一定なり。

此の心、なければ、世をそむき、道を学する様なれども、猶お、しり足をふみて、夏冬の衣服、等のことをした心にかけて、明日、猶お、明年の活命を思うて、仏法を学せんは、万劫、千生、学すとも、かなうべしとも、おぼえず。

また、さる人もや、あらんずらん。

存知の意趣、仏祖の教えには、あるべしとも、おぼえざるなり。

第五十二章

夜話に云く、

学人は、必ず、しぬべきことを思うべき道理は、勿論なり。

たとい、其のことをば、思わずとも、暫く、先ず、「光陰を徒らに過さじ」と思いて、無用のことをなして、徒らに、時を過さず、詮あることをなして、時を過すべきなり。

其の、なすべきことの中にも、亦、一切のこと、いずれか、大切なる？　と云うに、仏祖の行履の外は、みな、無用なり、と知るべし。

第五十三章

或る時、奘、問うて云く、

衲子の行履、旧損の衲衣、等を綴り補うて、すてざれば、ものを貪惜するに似たり。

また、旧きをすてて、新しき随いて用うれば、新しきを貪求する心あり。

両(ふたつ)ながら、咎、あり。

畢竟じて、いかんが、用心すべき？

答えて云く、

貪惜、貪求の二つをだにも離れなば、両頭、ともに、失なからん。

ただし、破れたるを綴りて、久しからしめて、新しきをむさぼらずんば、可ならんか。

第五十四章

夜話の次(ついで)に、奘、問うて云く、
父母の報恩、等の事は、作すべきや？
示して云く、
孝順は最用なる所なり。
然あれども、其の孝順に、在家、出家の別、あり。
在家は、孝経、等の説を守って、生につかえ、死につかうること、世人、みな、知れり。
出家は、恩をすてて、無為に入る故に、出家の作法は、恩を報ずるに、一人に、かぎらず、一切、衆生をひとしく父母のごとく、恩、深し、と思うて、なす所の善根を法界にめぐらす。
別して今生、一世の父母にかぎらば、無為の道にそむかん。
日々の行道、時々の参学、只、仏道に随順しもてゆかば、其れを真実の孝道とするなり。
忌日の追善、中陰の作善なんどは、皆、在家に用うる所なり。
衲子は、父母の恩の深きことをば、実の如く、しるべし。
余の一切も、亦、かくの如し、と知るべし。
別して一日を占めて、ことに善を修し、別して一人を分て廻向するは、仏意に、あらざるか。
戒経の父母、兄弟、死亡之日の文は、且く、在家に蒙むらしむるか。
大宋、叢林の衆僧、師匠の忌日には、其の儀式あれども、父母の忌日は、是れを修したり、とも見えざるなり。

第五十五章

一日、示して云く、

人の利鈍と云うは、志の到らざる時のこと、なり。

世間の人の、馬より落つる時、いまだ、地におち、つかざる間に、種々の思、起る。

身をも損じ、命をも失するほどの大事、出来る時は、誰人も、才学念慮を回すなり。

其の時は、利根も、鈍根も、同じく、ものを思い、義を案ずるなり。

然あれば、今夜、死に、明日、死ぬべし、と思い、あさましきことに逢いたる思いを作して、切に、はげまし、志をすすむるに、悟りをえず、と云うこと、なきなり。

中々、世智、弁聡なる、よりも、鈍根なるようにて切なる志を発する人、速かに、悟りを得るなり。

如来、在世の、周梨槃特のごときは、一偈を読誦することも難かりしかども、根性、切なるによりて、一夏に、証を取りき。

只、今ばかり、我が命は、存ずるなり。

死なざる先きに、悟を得ん、と切に思うて、仏法を学せんに、一人も、得ざるは、あるべからざるなり。

第五十六章

一夜、示して云く、

大宋の禅院に、麦、米、等をそろえて、悪しきをさけ、善きをとりて、飯、等にすること、あり。

是れを或る禅師の云く、

直饒(たと)い、我が頭をうち破ること、七分にすとも、米をそろうることなかれ、と頌につくり戒めたり。

此の、こころは、僧は、斎食、等をととのえて食することなかれ、只、有るに、したがいて、よければ、よくて食し、悪きをも、きらわずして食すべきなり。

只、檀那の信施、清浄なる常住食を以て、餓を除き、命をささえて、行道するばかりなり。

味いを以て善悪を択(えら)ぶことなかれ、と謂うなり。

今、我が会下の徒衆も、此の心、あるべし。

第五十七章

因（ちなみ）に、問うて云く、

学人、若し、自己、これ、仏法なり、外に向いて求むべからず、と、ききて、深く、此の言を信じて、向来の修行、参学を放下して、本性に任せて善悪の業をなして一期を過さん、此の見解、いかん？

示して云く、

学人、若し、自己、これ、仏法なり、外に向って求むべからず、と云いて、行を捨て、学を放下せば、此の放下の行を以て所求あり、と、きこえたり、これ、覓（もと）めざるには、あらず。

只、行、学、もとより、仏法なり、と証して、無所求にして、世事、悪業、等は、我が心に、なしたくとも、なさず、学道、修行の懶（ものう）きをも、いとい、かえりみず、此の行を以て打成一片に修して、道、成ずるも、果を得るも、我が心より、求ること、のうして、行ずるをこそ、外に向って覓（もとめ）ること、なかれ、と云う道理には、かなうべけれ。

南嶽の磚（かわら）を磨して鏡と、なせしも、馬祖の作仏を求めしを戒めたり。

坐禅を制するには、あらざるなり。

坐は、すなはち、仏行なり。

坐は、すなはち、不為なり。

是れ、便ち、自己の正体なり。

此の外、別に、仏法の求むべき、無きなり。

第五十八章

一日、請益の次でに云く、

近代の僧侶、多く、「世俗に随うべし」と云う。

今、思うに、然、あらず。

世間の賢すら、なお、民俗にしたがうことを「けがれたること」と云いて、屈原の如きんば、世は、挙(こぞ)って、皆、よえり、我は独り、醒(さ)めたり、とて、民俗に随わずして、終に、滄浪に没す。

況や、仏法は、事と事と、みな、世俗に違背せるなり。

俗は、髪を飾る、僧は、髪を剃る。

俗は、多く食す、僧は、一食す。

皆、そむけり。

然して、後に、還って、大安楽の人と、なるなり。

故に、僧は、一切、世俗に、そむけるなり。

第五十九章

一日、示して云く、

治世の法は、上、天子より、下、庶民に到るまで、各、皆な、其の官に居する者は、其の業を修す。

其の人に、あらずして、其の官に居するを乱天の事と云う。

政道が天意に合(かな)う時は、世、すみ、民、やすきなり。

故に、帝は、三更の三点に、起させ給いて、治世の時と、しましませり。

たやすからざることなり。

仏の法も、只、職のかわり、業の異なるばかりなり。

国王は、自ら、思量を以て、政道をはからい、先規をかんがえ、有道の臣を覓(もと)めて、政、天意に相、合(かな)う時、是れを治世と云うなり。

若し、是れを怠れば、天に背き、世、乱れ、民、苦しむなり。

其れより以下、諸の公卿、大夫、士、庶民、皆、各の司る所の業、あり。

其れに順うを人とは云うなり。

其れに背くは、天事を乱る故に、天の刑を蒙るなり。

然れば、仏法の学人も、世を離れ、家を出ればとて、徒らに、身を安んぜん、と思うこと、片時も、あるべからず。

初めは、利、あるに似たれども、後には、大いに害、あるなり。

出家の作法に順いて、全く、其の職を治め、其の業を修すべきなり。

世間の治世は、先規、有道をかんがえ、求むれども、先聖、先達の、たしかに相伝したる例、なければ、自ら、其の時の例に随うことも、あれども、仏子は、たしかなる先規、教文、顕然なり。

また、相承伝来の知識、現在、せり。

我に思量あり。

四威儀の中において、一々に、先規を思い、先達に随い、修行せんに、なじかは道を得ざるべき。

俗は、天意に合わんと思い、衲子は、仏意に合わんと思う。

修業、ひとしくして、得果、すぐれたれば、一得、永得ならん。

かくの如くの大安楽の為に、一世、幻化の此の身を苦しめて、仏意に随わんは、ただ、行者の心に、あるべし。

然ありと云えども、また、そぞろに、身を苦しめなすべからざることをなせ、と仏教には勧むること、なきなり。

戒行律儀に随い以てゆけば、自然に、身、やすく、行儀も尋常に、人めも、やすきなりほどに、只、今案の我見の身の安楽を捨てて、一向に、仏制に順ずべきなり。

第六十章

また、云く、

我れ、大宋、天童禅院に寓居せし時、浄老、宵には、二更の三点まで坐禅し、暁は、四更の二点、三点より、おきて、坐禅す。

長老と共に、僧堂裡に、坐す。

一夜も、懈怠なし。

其の間、衆僧、多く、眠る。

長老、巡り行きて、睡眠する僧をば、或いは、拳を以て打ち、或いは、履をぬいで打ち、恥かしめ進めて、眠りを醒す。

なお、眠る時は、照堂に行きて鐘を打ち、行者（あんじゃ）を召し、蝋燭をともし、などして、卒時に、普説して云く、

僧堂裡に集り居て、徒らに、眠りて、何の用ぞ？

然あらば、何ぞ、出家して入、叢林するや？

見ずや？

世間の帝王、官人、何人か、身をたやすくする？

君は王道を治め、臣は忠節を尽し、乃至、庶民は田を開き鍬を取るまでも、何人か、たやすくして世を過す？

是れをのがれて叢林に入て、空しく時光を過して、畢竟じて、何の用ぞ？

「生死、事大なり。無常、迅速なり」と、教家も、禅家も、同じく勧む。

今夕明旦、如何なる死をか受け、如何なる病をか、うけん？

且く、存するほど、仏法を行ぜず、睡り臥して空しく時を過すこと最も愚なり。

かくの如くなる故に、仏法は衰え行くなり。

諸方、仏法の盛なりし時は、叢林、皆、坐禅を専らにせしなり。

近代、諸方、坐禅を勧めざれば、仏法、澆薄しゆくなり、と。

かくの如くの道理を以て、衆僧をすすめて坐禅せしめられしこと、まのあたり、是れを見しなり。

今の学人も、彼の風を思うべし。

また、或時、近仕の侍者、等、云く、

僧堂裡の衆僧、眠り、つかれて、或は、病、起り、退心も起りつべし、これ、坐の久しき故か、坐禅の時刻を縮められればや、と申しければ、長老、大に嗔りて、云く、

然、あるべからず。

無道心の者の、仮令（かり）に、僧堂に居するは、半時、片時なりとも、猶お、眠るべし。

道心、ありて、修行の志、あらんは、長からんにつけて、いよいよ、喜び、修せんずるなり。

我れ、弱（わか）かりし時、諸方の長老を歴観せしに、ある長老、かくの如く、勧めて云く、

已前は、眠る僧をば、拳も欠けなん、とするほどに、打ちたるが、今は、老後になりて、ちから、よわくなりて、つよくも打ち得ざるほどに、よき僧も出来らざるなり。

諸方の長老も坐を緩く勧むる故に、仏法は衰微せるなり。

我は、弥（いよ）よ、打つべきなり、とのみ示されしなり。

第六十一章

また、云く、

道を得ることは、心を以て得るか？　身を以て得るか？

教家、等にも、「身心一如」と、いいて、身を以て得るとはいえども、猶お、一如の故に、と云う。

しかあれば、正しく、身の得ることは、たしかならず。

今、我が家は、身心、ともに、得るなり。

其の中に、心を以て仏法を計校する間は、万劫、千生、得べからず。

心を放下して、知見、解会を捨つる時、得るなり。

見色明心、聞声悟道の如きも、猶お、身の得るなり。

然あれば、道を得ることは、正しく、身を以て得るなり。

是れに依りて、坐を専らにすべし、と覚えて勧むるなり。

正法眼蔵随聞記 第三

侍者 懐奘 編

第三巻

第六十二章

示して云く、

学道の人、身心を放下して、一向に、仏法に入るべし。

古人、云く、「百尺、竿頭、如何、進、歩？」と。

然あれば、百尺の竿頭にのぼりて、足をはなたば、死ぬべし、と思いて、つよく取りつく心の、あるなり。

其れを一歩を進めよ、と云うは、よも、あしからじ、と思い切りて、身命を放下するように、度世の業より、はじめて、一身の活計に到るまで、思い、すつべきなり。

其れを捨てざらんほどは、いかに、頭燃を払うて、学道するようなりとも、道を得ることは、かなうべからざるなり。

ただ、思い切りて、身心、ともに、放下すべきなり。

第六十三章

ある時、さる比丘尼、問うて云く、
世間の女房なんどだにも、仏法とて勤学す。
比丘尼の身には、少々の、不可ありとも、何ぞ、仏法に、かなわざるべき？
と覚ゆ。
いかん？　と。
示して云く、
この義、然、あらず。
在家の女人は、其の身ながら、仏法を学して、得る事は、ありとも、出家の人、出家の心、なからんは、得べからず。
仏法の、人を択(えら)ぶには、あらず、人の、仏法に入らざればなり。
出家、在家の義、其の心、異なるべし。
在家人の、出家人の心あるは、出離すべし、出家人の、在家人の心あるは、二重の、ひがごと、なり。
用心、大に、異なるべきこと、なり。
作すことの難きには、あらず、能くすることの難きなり。
出離、得道の行は、人ごとに、心にかけたるには似たれども、能くする人、まれなればなり。
生死、事大なり。
無常、迅速なり。
心を緩くすること、なかれ。
世を捨てば、実に、世を捨つべきなり。

仮名は、いかにても、ありなんと、おぼゆるなり。

第六十四章

夜話に云く、

今時、世人を見る中に、果報も、よく、家をも起す人は、皆、心の正直に、人の為に、よき人なり。

故に、家をも保ち、子孫までも昌(さか)うるなり。

心に、曲節、ありて、人の為に悪しき人は、設(たと)い、一旦は、果報も、よく、家を保てる様なれども、終には、あしきなり。

設(たと)い、また、一期は、無事にして過す様なれども、子孫、必ず、衰微するなり。

また、人のために善きことをして、其の人に、よし、と思われ、喜びられんと思うてするは、あしきに比すれば、勝れたるに似たれども、猶お、是れは、自身を思うて、人のために真に、よきには、あらざるなり。

其の人には、知られざれども、人のために好き事をなし、乃至、未来までも、誰れが為と思わざれども、人の為に、よからん事をしおきなんどするを、誠の善人とは云うなり。

況や、衲僧は、是れに、こえたる心をもつべきなり。

衆生を思うこと、親、疎を分たず、平等に、済度の心を存し、世、出世間の利益、すべて、自利を思わず、人にも知られず、喜びられずとも、ただ、人の為に、よきことを心の中に作して、我れは、かくの如くの心もちたる、と人に知られざるなり。

此の故実は、まず、世を捨て、身を捨つべきなり。

我が身をだにも真実に捨てぬれば、人に、よく思われん、と謂(おも)う心は無きなり。

然あればとて、また、人は、なにとも思わば思え、とて、悪しきことを行じ、放逸ならんは、また、仏意に背くなり。

ただ、よき事を行じ、人の為に、善事をなして、代りを得ん、と思い、我が名を顕わさん、と思わずして、真実、無所得にして、利生の事をなす。

即ち、吾我を離るる、第一の用心なり。

此の心を存せん、と思わば、まず、無常を思うべし。

一期は、夢の如し。

光陰は、早く移る。

露の命は、消え易し。

時は、人を待たざる、ならい、なれば、只、しばらく、存じたるほど、聊(いささ)かのことにつけても、人の為に、よく、仏意に順わん、と思うべきなり。

第六十五章

夜話に云く、

学道の人は、最も貧なるべし。

世人を見るに、財、ある人は、まず、嗔恚、恥辱の二つの難、定めて、来るなり。

宝、あれば、人、是れを奪い取らん、と思う。

我は、取られじ、とする時、嗔恚、たちまちに、起る。

或は、是れを論じて、問答対決に及び、ついには、闘諍合戦をいたす。

かくの如くの、あいだに、嗔恚も起り、恥辱も来るなり。

貧にして貪らざる時は、先ず、此の難を免れて、安楽、自在なり。

証拠、眼前なり。

教文を待つべからず。

爾(しか)のみならず、古聖、先賢、是れを謗り、諸、天、仏祖、皆、是れを恥かしむ。

然あるに、愚痴なる人は、財宝を貯え、そこばくの嗔恚をいだくこと、恥辱の中の恥辱なり。

貧しうして道を思うは、先賢、古聖の仰ぐ所、諸仏、諸祖の喜ぶ所なり。

近来、仏法の衰微しゆくこと、眼前に、あり。

予、始めて、建仁寺に入りし時、見しと、後、七、八年、過ぎて、見しと、次第に、かわりゆくことは、寺の寮々に塗籠をおき、各々、器物を持し、美服を好み、財物を貯え、放逸の言語を好み、問訊、礼拝、等の衰微することを以て思うに、余所も推察せらるるなり。

仏法者は、衣盂の外に、財宝、等を一切、持つべからず。
なにを置かんが為に、塗籠をしつらうべきぞ。
人に、かくすほどの物をば、もつべからざるなり。
盗賊、等を怖るる故にこそ、かくし置かんと思え、捨て持たざれば、還って、やすきなり。
人をば、殺すとも、人には、殺されじ、と思う時こそ、身も苦しく、用心も、せらるれ、人は、我を殺すとも、我は報を加えじ、と思い定めつれば、用心も、せられず、盗賊も愁えられざるなり。
時として、安楽ならず、と云うこと、なし。

第六十六章

一日、示して云く、

宋土の海門禅師、天童の長老たりし時、会下に元首座と云う僧、ありき。

この人は、得法、悟道の人にて、行持、長老にも超えたり。

ある時、夜方、丈に参じて、焼香、礼拝して云く、

「請すらくは、某甲に、後堂首座を許せ」と。

時に、禅師、流涕して云く、

我れ、小僧たりし時より、未だ、かくの如きの事を聞かず。

汝、坐禅僧として首座、長老を所望すること、大いなる錯なり。

なんじ、既に、悟道せること、我れにも越えたり。

然あるに、首座を望むこと、是れ、昇進の為か？

許すことは、前堂をも、乃至、長老をも、許すべし。

その心操、卑劣なり。

誠に、是れを以て、余の未悟の僧は、推察せられたり。

仏法の衰微せること、是れを以て、知りぬべし、と云いて、流涕、悲泣す。

是れに、愧じて、辞す、といえども、猶お、終に、首座に請ず。

其の後、元首座、この詞を記録して、自らを愧じしめて、師の美言を顕わす。

今、是れを案ずるに、昇進を望み、物の、かしらとなり、長老とならんと思うことをば、古人、是れを慙じしむ。

ただ、道を悟らん、とのみ思いて、余事、あるべからず。

第六十七章

ある夜、示して云く、

唐の太宗、即位の後、故殿に栖み給えり。

破損せる故に、湿気、あがり、風、霧、冷かにして、玉体、おかされつべし。

臣下、等、造作すべき由を奏しければ、帝の言く、

時、農節なり。

民、定めて、愁、あるべし。

秋を待ちて、造るべし。

湿気に侵さるるは、地に、うけられず、風雨に侵さるるは、天に、合わざるなり。

天地に背かば、身、あるべからず、民を煩さずんば、自ら、天地に合うべし。

天地に合わば、身を侵すべからず、と云いて、終に、新宮を作らず、故殿に栖み給えり。

俗すら、猶お、かくの如く、民を思うこと、自身に超えたり。

況や、仏子は、如来の家風を受けて、一切、衆生を一子の如くに憐むべし。

我に属する侍者、所従なれば、とて、呵嘖し、煩わすべからず。

いかに、況や、同学等侶、耆年宿老、等をば、恭敬すること、如来の如く、すべし、と戒文、分明なり。

然あれば、今の学人も、人には色にいでて知られずとも、心の内に上下、親疎を分たず、人の為に、よからん、と思うべきなり。

大小の事につけて、人を煩わして、人の心を破ること、あるべからざるなり。

如来、在世に、外道、多く、如来を謗り悪(にく)みき。

仏弟子、問うて云く、

如来は、もとより、柔和を本とし、慈悲を心とす、一切、衆生、ひとしく、恭敬すべし、何が故にか、かくの如く、随わざる衆生あるや？

仏の言く、

吾れ、昔、衆を領せし時、多く、呵嘖、羯磨を以て、弟子をいましめき、是れに依て、今、かくの如し、と律の中に見えたり。

然あれば、即ち、設(たと)い、住持、長老として、衆を領したりとも、弟子の非をただし、いさめん時、呵嘖の詞を用いるべからず。

ただ、柔和の詞を以て、誡め、勧むとも、随うべくんば、随うべきなり。

況や、学人、親族、兄弟、等の為に、あらき言ばを以て、人を悪く呵嘖することは、一向に、やむべきなり。

能々(よくよく)、意を用うべし。

第六十八章

また、示して云く、

衲子の用心は、仏祖の行履を守るべし。

第一には、先ず、財宝を貪るべからず。

其の故は、如来の慈悲、深重なること、喩(たとえ)を以ても、量り難し。

然あるに、彼の所為、行履、皆、是れ、衆生の為なり。

一微塵、計(ばか)りも、衆生の為に利益ならざるべき事を行わせ給わず。

其の故は、仏は、是れ、輪王太子にて、ましませば、即位し給いて、一天をも御意にまかさせたまい、宝を以て弟子を憐み、所領を以て弟子をはごくみ給うべきに、何故に、位を捨てて、自ら、乞食を行じ給うや？

是れ、決定、末世の衆生の為にも、弟子の行道のためにも、利益となる因縁あるべき故に、財宝を貯えず、乞食を行じおき給えり。

爾(しかり)しより、このかた、天竺、漢土の祖師の、「よき」と人にも知られしは、みな、貧窮、乞食なさしめ給うなり。

況や、我が門の祖師、皆、財宝を貯うべからず、とのみ勧むるなり。

教家にも、此の宗を讃するには、先ず、貧をほめ、伝来の書録にも、貧を記して、ほむるなり。

いまだ、財宝に富み、豊かにして、仏法を行ずる、とは聞かず。

皆、よき仏法者と云うは、或は、布衲衣、常乞食なり。

禅門をよき宗と云い、禅僧を他に異なりとする、初の興りは、むかし、教院、律院、等に雑居せし時にも、身を捨てて、貧人なるを以てなり。

宗門の家風、先ず、此のことを存知すべし。

聖教の文理を待つべきにあらず。

我身も、田園、等を持ちたる時も、ありき。

また、財宝を領せし時も、ありき。

彼の時の身心と、此のころ、貧うして衣盂に、とぼしき時とを比するに、当時の心、すぐれたり、と覚ゆる、是れ、現、証なり。

第六十九章

また、云く、

古人の云く、

「不、似、其人、莫、語、其風」と。

云う心は、其の人の徳を学ばず、知らずして、其の人の、失、あるを見て、其の人は、よけれども、其の事は悪しさよ、悪しき事をよき人も、するかな、と思うべからずとなり。

ただ、其の人の徳を取りて、失を取ることなかれ。

「君子は徳を取りて失を取らず」と云うは、この心なり。

第七十章

一日、示して云く、

人は、必ず、陰徳を修すべし。

陰徳を修すれば、必ず、冥加、顕益、あるなり。

設(たと)い、泥木塑像の麁悪なりとも、仏像をば、敬うべし。

黄巻、赤軸の荒品なりとも、経教をば、帰敬すべし。

破戒、無慚の僧侶なりとも、僧体をば、仰信すべし。

内心に信心を以て敬礼すれば、必ず、顕福を蒙るなり。

破戒、無慙の僧、疎相の仏、麁品の経なればとて、不信、無礼なれば、必ず、罰を蒙るなり。

然あるべき、如来の遺法にて、人天の福分となりたる仏像、経巻、僧侶なり。

故に、帰敬すれば、必ず、益あり。

不信なれば、罪を受くるなり。

いかに、希有に、浅猿(あさまし)くとも、三宝の境界をば、帰敬すべきなり。

「禅僧は、善を修せず、功徳を用いず」と云いて、悪行を好むは、究めたる、ひが事なり。

先規、いまだ、悪行を好むことをきかず。

丹霞天然禅師は、木仏を焼く。

是れらこそ、悪事と見えたれども、一段の説法の施設なり。

彼の師の行状の記を見るに、坐するに必ず儀あり、立するに必ず礼あり、常に貴き賓客に向えるが如し。

暫時の坐にも必ず跏趺して叉手す。

常住物を守ること眼睛の如くす。

勤修するもの、あれば、必ず、これを賀す。

少善なれども、是れを重くす。

常途の行状、ことに勝れたり。

彼の記をとどめて今の世までも叢林の亀鑑とするなり。

爾(しか)のみならず、諸(もろもろ)の有道の師、先規、悟道の祖を見聞するに、皆、戒行を守り、威儀をととのえ、設(たと)い、少善といえども是れを重くす。

いまだ、悟道の師の、善根を忽諸(ゆるがせ)にすることを聴かず。

故に、学人、祖道に随わんと思わば、必ず、善根を軽しめざれ。

信仰を専らにすべし。

仏祖の行道は、必ず、衆善の聚まる所なり。

諸法、皆、仏法なり、と通達しつる上は、悪は、決定、悪にして、仏祖の道に遠ざかり、善は、決定、善にして、仏道の縁となる、と知るべし。

若し、かくの如くならば、なんぞ、三宝の境界を重くせざらんや?!

第七十一章

また、云く、

今、仏祖の道を行ぜん、と思わば、所期も無く、所求も無く、所得ものうして、無利に、先聖の道を行じ、祖々の行履を行ずべきなり。

所求を断じ、仏果を望むべからざればとて、修行を止め、本の悪行に住まらば、却りて、是れ、本の所求にとどまり、本の窠臼に堕するなり。

全く、一分の所期を存ぜずして、只、人天の福分とならん、とて、僧の威儀を守り、済度、利生の行履を思い、衆善をこのみ修して、本の悪をすてて、今の善にとどこおらずして、一期、行じもてゆかば、是れを古人も「打破、漆桶、底」と云うなり。

仏祖の行履と云うは、かくの如くなり。

第七十二章

一日、僧、来て、学道の用心を問う。

次でに、示して云く、

学道の人は、先ず、須く、貧なるべし。

財、おおければ、必ず、其の志を失う。

在家学道のもの、猶お、財宝にまとわり、居所をむさぼり、眷属に交われば、設(たと)い、其の志、ありといえども、障道の因縁、多し。

古来、俗人の参学する、多けれども、其の中に、「よし」と云うも、猶お、僧には及ばず。

僧は、三衣、一鉢の外は、財宝をもたず、居所を思わず、衣食を貪らざる間(あい)だ、一向に、学道すれば、分々に皆、得益、あるなり。

其のゆえは、貧なるが、道に親きなり。

龐公は、俗人なれども、僧に、おとらず、禅席に名をとどめたるは、かの人、参禅のはじめ、家の財宝を持ち出して海に沈めんとす。

人、是れを諫めて云く、「人にも与え、仏事にも用いらるべし」と。

時に、他に対して云く、

我、已に、冤(あだ)なり、と思いて、是れを捨つ。

冤(あだ)と、しりて、何ぞ、人に与うべき?

宝は身心を愁えしむる、あだ、なり、と云いて、ついに、海に入れ了りぬ。

然うじて後、活命の為には、笊をつくりて売りて過ぎけるなり。

俗なれども、かくの如く、財宝を捨ててこそ、善人とも云われけれ。

いかに、況や、僧は、一向に、すつべきなり。

第七十三章

僧の云く、

唐土の寺院には、定まりて、僧祇物あり、常住物、等ありて、置かれたれば、僧の為に行道の資縁となりて、其の煩い、なし。

此の国は、其の義、なければ、一向、捨棄せられては、中々、行道の違乱とや、ならん。

かくの如くの衣食、資縁を思いあてて、あらば、よしと覚ゆ。

いかん？

示して云く、

然、あらず。

中々、唐土よりは、此の国の人は、無理に僧を供養し、非分に人に物を与うること、あるなり。

先ず、人は知らず、我れは、此の事を行じて道理を得たるなり。

一切、一物も持たず、思い、あてがうことも無うして、十余年、過ぎ了りぬ。

一分も、財を貯えん、と思うこそ、大事なれ。

僅（わずか）の命をいくるほどのことは、いかに、と思い、貯えざれども、天然として、あるなり。

人、皆な、生分、あり。

天地、是れを授く。

我れ、走り求めざれども、必ず、有るなり。

況や、仏子は、如来、遺嘱の福分、あり。「不求、自、得」なり。

ただ、一向に、すてて、道を行ぜば、天然、これ、あるべし。

是れ、現、証なり。

第七十四章

また、云く、

学道の人、多分、云う、「若し、其のことをなさば、世人、是れを謗せんか？」と。

此の条、太（はなは）だ、非なり。

世間の人、いかに、謗するとも、仏祖の行履、聖教の道理にてだにもあらば、依行すべし。

設（たと）い、世人、挙（こぞ）って、ほむるとも、聖教の道理ならず、祖師も行ぜざることならば、依行すべからず。

其れ故に、世人の親疎、我れをほめ、我れを誹（そし）れば、とて、彼の人の心に随いたりとも、我が命、終の時、悪業にも引かれ、悪道へ落ちなん時、彼の人、いかにも、救うべからず。

また、設（たと）い、諸人に謗せられ、悪（にく）まるるとも、仏祖の道に依行せば、真実に、我をたすけられんずれば、人の、謗すれば、とて、道を行ぜざる、べからず。

また、かくの如く、謗し、讃する人、必ずしも、仏祖の行を通達し証得せるにあらず。

なにとしてか、仏祖の道を世の善悪を以て判ずべき？

然あれば、世人の情には、順うべからず。

只、仏道に依行すべき道理ならば、一向に、依行すべきなり。

第七十五章

また、ある僧、云く、

某甲、老母、現在せり。

我れは、即ち、一子なり。

ひとえに、某甲が扶持に依りて、度世す。

恩愛も、ことに深し。

孝順の志も、深し。

是れに依りて、いささか、世に随い、人に随うて、他の恩力を以て、母の衣糧にあつ。

我れ、若し、遁世、籠居せば、母は、一日の活命も存じ難し。

是れに依りて、世間にありて、一向、仏道に入らざらんことも難事なり。

若し、猶おも、捨てて、道に入るべき道理あらば、其旨、いかなるべきぞ？

示して云く、

此こと、難事なり。

他人の、はからいに非ず。

ただ、自ら、よくよく、思惟して、誠に、仏道に志、有らば、いかなる支度、方便をも案じて、母儀の安堵、活命をも支度して、仏道に入らば、両方、倶に、よき事なり。

切に、思うことは、必ず、とぐるなり。

強き敵、深き色、重き宝なれども、切に、思う心、ふかければ、必ず、方便も出来る様、あるべし。

是れ、天地、善神の冥加も、ありて、必ず、成ずるなり。

曹溪の六祖は、新州の樵人にて、薪を売りて、母を養いき。

一日、市にて、客の、金剛経を誦するを聴きて、発心し、母を辞して、黄梅に参ぜし時、銀子、十両を得て、母儀の衣糧にあてたり、と見えたり。

是れも、切に、思いける故に、天の与えたりけるか、と覚ゆ。

能々（よくよく）、思惟すべし。

是れ、最もの道理なり。

母儀の一期を待ちて、其の後、障碍、なく、仏道に入らば、次第、本意の如くにして神妙なり。

しかあれども、また、知らず、老少、不定なれば、若し、老母は、久しく、とどまりて、我は、先に去ること出来らん時に、支度、相違せば、我れは仏道に入らざることをくやみ、老母は是れを許さざる罪に沈みて、両人、倶に、益、なくして、互に、罪を得ん時、いかん？

若し、今生を捨てて、仏道に入りたらば、老母は、設（たと）い、餓死すとも、一子を放（ゆ）るして道に入らしめたる功徳、豈に、得道の良縁に、あらざらんや？！

尤も、曠劫、多生にも、捨て難き恩愛なれども、今生、人身を受けて、仏教にあえる時、捨てたらば、真実、報恩者の道理なり。

なんぞ、仏意に、かなわざらんや？！

「一子、出家すれば、七世の父母、得道」と見えたり。

「何ぞ、一世の浮生の身を思いて、永劫、安楽の因を空しく過さんや？！」

と云う道理も、あり。

是れらをよくよく、自ら、計うべし。

正法眼蔵随聞記 第四

侍者 懐奘 編

第四巻

第七十六章

一日、参学の次でに、示して云く、

学道の人は、自解を執することなかれ。

設(たと)い、会する所、ありとも、若しも、また、決定、よからざる事もや、あらん、また、是れよりも、よき義も、あらん、と思いて、広く知識をも訪(とぶら)い、先人の言をも尋ぬべきなり。

また、先人の言なりとも、かたく執する事なかれ。

若し、是れも、あしくもや、あるらん、信ずるにつけても、と思いて、次第に、すぐれたる事あらば、其れに、つくべきなり。

第七十七章

また、云く、

「南陽、忠、国師、問、紫璘、供奉、『甚（いずれの）、所、来？』。

奉、云、『城南、来』。

師、云、『城南、艸（くさ）、作（なす）、何色？』。

奉、云、『作（なす）、黄色』。

師、乃、問、童子、『城南、艸、作、何色？』。

子、云、『作（なす）、黄色』。

師、云、『祇（ただ）、這（この）、童子、亦、可、簾、前、賜、紫、対、御、談、玄』」。

しかあれば、童子も、国皇の師として真色を答うべし。

汝が見所、常途に超えずとなり。

後来、有（ある）人の云く、

供奉が常途に超えざる過、甚（いず）れの所にか、ある？

童子も、同じく、真色を説く。

是れこそ、真の知識たらめ、と云いて、国師の義を用いず。

故に、知んぬ、必しも、古人の言ばを用いず、ただ、実の道理を存ずべきなり。

疑心は、あしき事なれども、また、信ずまじきことをかたく執して、尋ぬべき義をも問わざるは、あしきなり。

第七十八章

また、示して云く、

学人の第一の用心は、先ず、我見を離るべし。

我見を離るる、と云うは、此の身を執すべからず。

設(たと)い、古人の語話を究め、常坐、鉄、石の如くなりとも、此の身に著(ちゃく)して離れずんば、万劫、千生にも、仏祖の道を得べからず。

いかに、況や、権実の教法、顕密の正教を悟り得たり、と云うとも、身を執する、こころを離れずんば、徒らに、他の宝を数えて、自ら、半銭の分、なし。

只、請うらくは、学人、静坐して、道理を以て、此の身の始終を尋ぬべし。

身体髪膚は、父母の二滴、一息、とどまりぬれば、山野に離散して、終に、泥土となる。

何を持ちてか身と執せん。

況や、法を以て見れば、十八界の聚散、いずれの法を、決定して、我が身とせん?!

教内、教外、別なりとも、我が身の始終、不可得なることを行道の用心とすること、是れ、同じし。

先ず、此の道理に達すれば、実の、仏道、顕然なるものなり。

第七十九章

一日、示して云く、

古人、云く、「親近、善者、如、霧露中、行。雖、不、湿、衣、時々、有、潤」。

謂う心は、善人に、なるれば、覚えざるに、善人となるなり。

昔、倶胝和尚に仕えし一人の童子のごときは、いつ、学し、いつ、修したりとも見えず、覚えざれども、久参に近づいたる故に、悟道す。

坐禅も、自然に、久しくせば、忽然として、大事を発明して、坐禅の正門なることを知るべきなり。

第八十章

嘉禎二年、臘月、除夜、始めて、懐奘を興聖寺の首座に請す。

即ち、小参の次で、初て、秉払を首座に請う。

是れ、興聖寺、最初の首座なり。

小参の趣は、宗門の仏法伝来の事を挙揚するなり。

初祖、西来して、少林に居して、機をまち、時を期して、面壁して坐せしに、

某の歳の窮臘に、神光、来参しき。

初祖、最上乗の器なり、と知りて、接得して、衣、法、共に、相承伝来して、

児孫、天下に流布し、正法、今日に、弘通す。

当時、始めて、首座を請し、今日、初て、秉払を行わしむ。

衆の少きを憂うること莫れ。

身の初心なるを顧みることなかれ。

汾陽は、僅(わずか)に、六、七人、

薬山は、十衆に満たざるなり。

然あれども、皆、仏祖の道を行じき。

是れを叢林の、さかんなる、と云いき。

見ずや？

竹の声に道を悟り、桃の花に心を明らむ。

竹、豈に、利鈍あり、迷悟あらんや？！

花、何ぞ、浅深あり、賢愚あらん？！

花は年々に開くれども、人、みな、得悟するに非ず。

竹は時々に響けども、聞く者、尽く(ことごとく)、証道するにあらず。

ただ、久参、修持の功により、弁道、勤労の縁を得て、悟道、明心するなり。
是れ、竹の声の、独り利なるに、あらず。
また、花の色の、殊に深きに、あらず。
竹の響、妙なり、といえども、自ら、鳴らず、瓦（かわら）の縁をまちて声を起す。
花の色、美なり、といえども、独り開くるに、あらず、春風を得て開くるなり。

学道の縁も、また、かくの如し。
此の道は、人々、具足なれども、道を得る事は、衆縁による。
人々、利なれども、道を行ずることは衆力を以てす。
ゆえに、今、心をひとつにし、志をもっぱらにして、参究、尋覓すべし。
玉は琢磨によりて器となる。
人は練磨によりて仁となる。
いずれの玉か、初めより、光、ある?!
誰人か、初心より、利なる?!
必ず、すべからく、これ、琢磨し、練磨すべし。
自ら卑下して、学道をゆるくすることなかれ。
古人の云く、「光陰、空しく、わたることなかれ」と。
今、問う、
時光は、惜むによりて、とどまるか?
惜めども、とどまらざるか?
すべからく、しるべし。
時光は、空しく、わたらず、人は、空しく、わたることを。
「人も、時光と、おなじく、いたずらに、過すこと、なく、切に、学道せよ」と云うなり。

かくのごとく、参究を同心にすべし。

我れ独り挙揚するも、容易にするにあらざれども、仏祖、行道の儀、大概、みな、かくの如くなり。

如来の開示に随いて、得道するもの、多けれども、また、阿難によりて悟道する人も、ありき。

新首座、非器なり、と卑下することなかれ。

洞山の麻、三斤を挙揚して同衆に示すべし、と云いて、座を下りてのち、再び、鼓を鳴らして、首座、秉払す。

是れ、興聖、最初の秉払なり。

懐奘、三十九の歳なり。

第八十一章

一日、示して云く、
俗人の云く、
何人か、好衣を望まざらん？
誰か重味を貪らざらん？
然あれども、道を存せん、と思う人は、山に入り、雲に眠り、寒きをも忍び、飢えをも忍ぶ。
先人、苦しみ、なきに非ず、是れを忍びて道を守ればなり。
後人、是れを聴いて、道を慕い、徳を仰ぐなり。
俗すら、賢なるは、猶お、かくの如し。
仏道、豈に、然らざらんや？！
古人も、皆、金骨には、あらず。
在世も、ことごとく、上器には、あらず。
大小の律蔵によりて、諸の比丘をかんがうるに、不可思議の不当の心を起すも、ありき。
然あれども、後には、皆、得道し、羅漢となれり、と見えたり。
しかあれば、我れらも、賤(いやし)く拙し、と云うとも、発心、修行せば、決定、得道すべし、と知りて、即ち、発心するなり。
古えも、皆、苦を忍び、寒にたえて、愁いながら、修行せしなり。
今の学者、苦しく、愁うるとも、只、しいて、学道すべきなり。

第八十二章

示して云く、

学道の人、悟を得ざることは、即ち、ただ、旧見を存するゆえなり。本より、誰が、おしえたり、とも知らざれども、心と云うは、念慮知覚なり、と思い、心は草木なり、といえば、信ぜず。

仏と云えば、相好、光明、あらんずる、と思いて、仏は瓦礫、と説けば、耳を驚かす。

かくのごときの執見、父も相伝せず、母も教授せず、只、無理、自然に、久しく、人のことばにつきて、信じ来れることなり。

然あれば、今も、仏祖、決定の説なれば、あらためて、心は艸木、と云わば、便ち、艸木を心、と知り、仏は瓦礫、といわば、瓦礫を、便ち、仏なり、と信じて、本執をあらため、去らば、道を得べきなり。

古人の云く、「日、月、あきらかなれども、浮雲、是れをおおう。叢、蘭、茂せん、とすれども、秋風、吹いて、是をやぶる」と。

貞観政要に、これを引いて、賢王と悪臣とに喩う。

今、云く、

浮雲、おおうとも、久しからず。

秋風、破るとも、また、開くべし。

臣、わるくとも、王の賢、強くんば、転ぜらるべからず。

今、仏道を存せんことも、また、かくの如くなるべし。

いかに、悪心、おこるとも、かたく守り、久しく保たば、浮雲も、きえ、秋風も止まるべきの道理なり。

第八十三章

一日、示して云く、

学人、初心のときは、道心、ありても、無くても、経論、聖教、等をよくよく見るべし、まなぶべし。

我れ、始めて、まさに、無常によりて、聊(いささ)か、道心を発し、終に、山門を辞して、遍く諸方を訪(とぶら)い、道を修せしに、建仁寺に寓せし中間、正師にあわず、善友なき故に、迷いて、邪念を起しき。

教道の師も、先ず、学問、先達にひとしくして、よき人と成り、国家にしられ、天下に名誉せん事を教訓する故に、教法、等を学するにも、先ず、此の国の上古の賢者にひとしからんことを思い、大師、等にも同じからん、と思いき。

因に、高僧伝、続高僧伝、等を披見して、大唐の高僧、仏法者の様子を見しに、今の師のおしえの如くには、あらず。

また、我が起せるようなる心は、皆、経論、伝記、等には、いとい、にくみけり、と思いしより、ようやく道理をかんがうれば、名聞を思うとも、当代、下劣の人に「よし」と思われん、よりも、ただ、上古の賢者、向後の善人をはずべし。

ひとしからんことを思うとも、此国の人よりも、唐土、天竺の先達、高僧をはじて、彼にひとしからん、と思うべし。

乃至、諸、天、冥衆、諸、仏、菩薩、等にひとしからん、とこそ思うべけれ、と。

この道理を得て、後には、此の国の大師、等は、土、瓦の如く、おぼえて、
従来の身心、皆、あらためき。
仏の一期の行儀を見れば、王位をすてて、山林に入り、成道の後も、一期、
乞食す、と見えたり。
律に云く、「知、家、非、家、捨、家、出家」と云々。
古人、云く、「奢りて、上賢にひとしからん、と思うことなかれ。賤うして、
下賤にひとしからん、と思うことなかれ」と。
云う、こころは、共に、慢心なり。
高うしても下らんことを忘るることなかれ。
安うしても危からん事を忘るることなかれ。
今日、存するとも、明日と思うことなかれ。
死の、至りて、ちかく、あやうきこと、脚下にあり。

第八十四章

示して云く、

愚痴なる人は、其の詮なきことを思い、云うなり。

ここにつかわるる老尼公ありけるが、当時、いやしげにして在るをはずる顔にて、ともすれば、人に向いては、昔は、上臈にて、ありし、よしを語る。たとい、而今の人に、「さも、あり」と思われたりとも、なんの用とも覚えぬ。

甚だ無用なり、とおぼゆるなり。

皆人の、思わくは、「此の心、あるか？」と覚ゆるなり。

道心の、なきほども知られたり。

是れらの心を改めて、少し、人には似るべきなり。

また、有る入道の、究めて、無道心なる、あり。

去り難き知音にてある故に、道心、おこらんこと、仏、神に祈誓せよ、と云わん、と思う。

定めて、彼れ、腹立して、中をたがうこと、あらん。

然あれども、道心を発さざらんには、得意にても、たがいに、詮、なかるべし。

第八十五章

示して云く、

古に、三たび、復（かえ）そうして、後に、云え、と。

云う心は、凡そ、ものを云わん、とする時も、事を行ぜん、とする時も、必ず、みたび、復そうして、後に、言行すべし、となり。

先儒の、おもわくは、三たび、思い、かえりみるに、三たびながら、善ならば、云い、行なえ、と云うなり。

宋土の賢人、等の心は、三たび、復そうす、と云うは、幾度も、復せ、と謂う心なり。

言より、さきに、思い、行より、さきに、思い、思うたびごとに、かならず、善ならば、言行すべき、となり。

衲子も、亦、必ず、然か、あるべし。

我が思うことも、言うことも、あしきこと、あるべき故に、まず、「仏道に合うや？　否や？」と、かえりみ、「自他の為に、益、ありや？　いなや？」と、よくよく、思い、かえりみて、後に、善なるべくんば、行いもし、言いもすべきなり。

行者、若し、かくのごとく、心を守らば、一期、仏意に背かざるべし。

予、昔年、初て、建仁寺に入りし時は、僧衆、随分に、三業を守りて、仏道の為め、利他のために、悪きことをば、云わじ、せじ、と各々志せしなり。

僧正の徳の余残、ありしほどは、かくの如くなりき。

今時は、其の儀、なし。

今の学者、しるべし。

決定して、自他の為め、仏道の為に、詮、あるべきことならば、身をわすれても、言い、若しは、行いもすべきなり。

其の詮、なきことは、言行すべからず。

宿老耆年の、言行する時は、末臘の人は、言をまじゆべからず。

是れ、仏制なり。

よくよく、是れを思うべし。

身をわすれて、道を思うことは、俗、なお、此の心、あり。

第八十六章

むかし、趙の藺相如と云いし者は、下賤の人なりしかども、賢なるによりて、趙王にめしつかわれて、天下の事をおこないき。

趙王の使として、趙璧と云う玉を秦の国へつかわさしめたまう。

彼の璧を十五城にかえん、と秦王の云いし故に、相如にもたせて、つかわすに、余の臣下、議して云く、

是れほどの宝を相如ごときの賤人に持せて、つかわすこと、国に、人、なきに似たり。

余臣の、はじ、なり。

後代の、そしり、なるべし。

みちにて、此の相如を殺して、璧を奪い取らん、と議しけるを、ときの人、ひそかに、相如にかたりて、此のたびの使を辞して、命を保つべし、と云いければ、相如、云く、

某、敢て、辞すべからず。

相如、王の使として、璧を持ちて、秦にむかうに、佞臣の為に、殺されたる、と後代に聞えんは、我がために、よろこびなり。

我が身は死すとも、賢の名は残るべし、と云いて、終に、むかいぬ。

余臣も、此の言ばを聴きて、我れら、此の人をうちうること、あるべからず、とて、とどまりぬ。

相如、ついに、秦王に見(まみ)えて、璧を秦王にあたうるに、秦王、十五城をあたうまじき気色、見えたり。

時に、相如、はかりごとを以て、秦王にかたりて云く、

その璧に、きず、あり、我、是れを示さん、と云いて、璧をこい取りて、後に、相如が云く、

王の気色を見るに、十五城を惜める気色、あり。

然あらば、我が頭を以て、此の璧を銅柱にあてて、うちわりてん、と云いて、嗔れる眼を以て、王を見て、銅柱のもとに、よる気色、まことに、王をも犯しつべかりし。

時に、秦王の云く、

汝、璧をわることなかれ。

十五城を与うべし。

あい、はからわんほど、汝、璧を持つべし、と云いしかば、相如、ひそかに、人をして璧を本国へ、かえしぬ。

後に、また、澠池と云う所にて、趙王と秦王と、あそびしに、趙王は琵琶の上手なり。

秦王、命じて、弾ぜしむ。

趙王、相如にも云い合せずして、即ち、琵琶を弾じき。

時に、相如、趙王の、秦王の命に随えることを嗔りて、我、行て、秦王に簫を吹かしめん、と云いて、秦王につげて云く、

王は簫の上手なり。

趙王、聞かんことをねがう。

王、吹きたもうべし、と云いしかば、秦王、是れを辞す。

相如が云く、

王、若し、辞せば、王をうつべし、と云う。

時に、秦の将軍、剣を以て近づき、よる。

相如、これをにらむに、両眼、ほころび、さけてけり。

将軍、恐れて、剣をぬかずして、帰りしかば、秦王、ついに、簫を吹く、と云えり。

また、後に、相如、大臣となりて、天下の事を行いし時に、かたわらの大臣、我にまかさぬ事をそねみて、相如をうたん、と擬する時に、相如は、所々に、にげかくれ、わざと、参内の時も、参会せず、おじ、おそれたる気色なり。時に、相如が家人、いわく、「かの大臣をうたんこと、易きことなり。なんが故に、おじ、かくれさせたもう?」と云う。

相如が云く、

我れ、彼をおそるるにあらず。

我が眼を以て秦の将軍をも退け、秦の璧をも奪いき。

彼の大臣、うつべきこと、云うにも足らず。

然あれども、いくさを起し、つわものを集むることは、敵国を防ぐためなり。今、左右の大臣として国を守るもの、若し、二人、なかをたがいて、いくさを起して、一人、死せば、一方、欠くべし。

然あらば、隣国、喜びて、いくさを起すべし。

かるがゆえに、二人、ともに、全うして、国を守らん、と思う故に、彼と、いくさを起さず、と云う。

かの大臣、此のことばを聞きて、はじて、還って、来り、拝して、二人、共に、和して、国をおさめしなり。

相如、身をわすれて、道を存すること、かくの如し。

今、仏道を存することも、彼の相如が心の如くなるべし。

寧ろ、道、ありては、死すとも、道、無くして、いくることなかれ、と云々。

第八十七章

示して云く、

善悪と云うこと、定め難し。

世間の人は、綾羅錦繍をきたるを「よし」と云う。

麁布、糞掃衣を「わるし」と云う。

仏法には、此れを「よし」とし「清し」とし、金銀、錦綾を「わるし」とし「けがれたり」とす。

かくの如く、一切のことにわたりて、皆、然り。

予が如きも、聊(いささ)か、韻声をととのえ、文字をかき、すぐるるを俗人、等は、尋常ならぬことに云うも、あり。

また、或人は、「出家、学道の身として、かくの如きのこと知れる」と、そしる人も、あり。

いずれをか、定めて、善として取り、悪として、すつべきぞ？

文に云く、「ほめて、白品の中にあるを善と云う。そしりて、黒品の中におくを悪と云う」と。

また、云く、「苦を受くべきを悪と云う。楽をまねくべきを善と云う」と。

かくの如く、子細に分別して、真実の善を見て、行じ、真実の悪を見て、すつべきなり。

僧は清浄の中より来れるものなれば、人の欲を起すまじきものを以て「よし」とし「きよき」とするなり。

第八十八章

示して云く、
世界の人、多分、云く、
学道のこころざし、あれども、世は末世なり。
人は下劣なり。
如法の修行には、たうべからず。
只、随分に、やすきにつきて、結縁を思い、他生に開悟を期すべし、と。
今、云う、此の言は、全く、非なり。
仏教に、正、像、末を立つること、暫く、一途の方便なり。
在世の比丘、必ずしも、皆、すぐれたるに、あらず。
不可思議に、希有に、あさましく、下根なるも、ありき。
故に、仏、種々の戒法、等をもうけ玉うこと、皆、わるき衆生、下根、の為なり。
人々、皆、仏法の器なり。
かならず、非器なり、と思うことなかれ。
依行せば、必ず、証を得べきなり。
既に、心、あれば、善悪を分別しつべし。
手あり、足あり、合掌、歩行に、かけたる事あるべからず。
しかあれば、仏法を行ずるには、器をえらぶべきに、あらず。
人界の生は、皆、是れ、器量なり。
余の畜生、等の生にては、かなうべからず。
学道の人、ただ、明日を期することなかれ。

今日、今時ばかり、仏法に随いて、行じゆくべきなり。

第八十九章

示して云く、

俗の云く、「城を傾むくることは、中に、ささやき言、出来るに依るなり」と。

また、云く、「家に、両言ある時は、針をも買うこと、なし。家に両言なき時は、金をも買う、あたい、あり」と。

俗、猶お、家をたもち、城を守るに、同心ならざれば、終に、ほろぶ、と云えり。

況や、出家人は、一師に学して、水、乳の和合せるが如く、すべし。

また、六和敬の法あり。

各々の寮々をかまえて、身をへだてて、心々に学道の用心することなかれ。

一船にのりて海をわたるが如し。

同心に威儀を同うし、たがいに非を改め、是れに随いて同じく学道すべきなり。

是れ、仏、在世より、行じ来れる儀式なり。

第九十章

示して云く、

楊岐山の会禅師、はじめ、住持の時、寺院、旧損して、僧のわずらい、ありし時、知事、申して云く、「修理、あるべし」と。

会の云く、

堂閣、破れたりとも、露地、樹下には、まさるべし。

一方、破れて、もらば、一方の、もらぬ所に居して、坐禅すべし。

堂宇、造作によりて、僧衆、悟りを得べくんば、金、玉を以ても、つくるべし。

悟は、居所の善悪には、よらず、只、坐禅の功の多少に、あるべし、と。

翌日、上堂に云く、「楊岐、乍（はじめて）、住、屋、壁、疎、満、床、尽（ことごとく）、布、雪、真珠。縮却、項、暗、嗟吁。良久、云、『翻（ひるがえって）、憶（おもう）、古人、樹下、居』」と。

ただ、仏道のみに、あらず。

政道も、亦、かくの如し。

唐の太宗は、いやをつくらず。

龍牙、云く、

「学道、先（まず）、須（すべからく）、且、学、貧。学、貧、貧後、道、方（まさに）、親」と云う。

昔、釈尊より、今に至るまで、真実、学道の人、「たからに、ゆたかなり」とは聞かず、見ざるなり。

第九十一章

一日、ある客僧、問うて云く、

近代、遁世の法は、各々、斎料、等のことをかまえ、用意して、後のわずらいの、なきように、支度す。

是れ、小事なり、といえども、学道の資縁なり。

かけぬれば、ことの違乱、出来る。

今、師の御様を承り及ぶには、一切、其の支度、なく、ただ、天運にまかす、と。

若し、実に、かくのごとくならば、後時の違乱、あらんか？

いかん？

答えて云く、

事、皆、先証、あり。

敢て、私曲を存するに、あらず。

西天、東地の仏祖、皆、かくの如し。

白毫、一分の福の尽くる期、あるべからず。

何ぞ、私（わたくし）に、活計をいたさん。

また、明日の事は、いかに、すべし、とも定め図り難し。

此の様は、仏祖の、みな、行じ来れる所にて、私（わたくし）、なし。

若し、事を闕如して絶食せば、其の時にのぞんで、方便をも、めぐらさめ。

兼て、是れを思うべきことには、あらざるなり。

第九十二章

示して云く、

伝え聞く、

実、否は、知らざれども、

故 持明院の中納言 入道、あるとき、秘蔵の太刀を盗まれたりけるに、士の中に犯人ありけるを、余の士、沙汰し出して、まいらせたりしに、入道の、云えらく、

此れは、我が太刀に、あらず、ひがごとなり、とて、かえされたり。

決定、その太刀なれども、士の恥辱を思いて、かえされたり、と人、皆、是れを知りけれども、其の時は、無為にして、すぎけり。

故に、子孫も、繁昌せり。

俗、なお、心ある人は、かくの如し。

いわんや、出家人、必ず、此の心、あるべし。

出家人は、もとより、身に財宝、なければ、智慧、功徳を以て、たからとす。

他の無道心なる、ひがごとなんどを直に、面に、あらわして、非に、おとすべからず、方便を以て、彼の、はらたつまじき様に云うべきなり。

暴悪なるは、其の法、久しからず、と云う。

設(たと)い、法を以て呵嘖するとも、あらき言葉なるは、法も久しからざるなり。

小人、下器は、いささかも、人の、あらき言ばに、必ず、即ち、はらだち、恥辱を思うなり。

大人、上器には、似るべからず。

大人は、しか、あらず。

設(たっ)い、打たるれども、報を思わず。

今、我国には、小人、多し。

つつしまずんば、あるべからざるなり。

正法眼蔵随聞記 第五

侍者 懐奘 編

第五巻

第九十三章

一日、示して云く、

仏法の為には、身命を惜むことなかれ。

俗、猶お、道の為には、身命をすて、親族をかえりみず、忠を尽し、節を守る。

是れを、忠臣とも云い、賢者とも云うなり。

昔、漢の高祖、隣国と、いくさを起す時、ある臣下の母、敵国に、ありき。

官軍も、「二心、有らんか?」と疑いき。

高祖も、「かれ、若し、母を思いて、敵国へ、さることもや、あらんずらん、若し、さ、あらば、軍、やぶるべし」とて、あやぶむ。

爰(ここ)に、彼の母も、「我が子、もし、我によりて、我が国へ来ることもや、あらんか?」と、おもい、誡めて、いわく、「われによりて、いくさの忠をゆるくすることなかれ。我れ、もし、いきていたらば、汝、二心もや、あらん」と云いて、剣に身をなげて、うせてけり。

其の子、本より、ふた心、なかりしかば、其の、いくさに、忠節を致す志、深かりける、と云う。

況や、衲子の、仏道を存するも、必ずしも、二心、無き時、まことに、仏道に契うべし。

仏道には、慈悲、智慧、本より、そなわる人も、あり。

設(たと)い、無き、ひとも、学すれば、得るなり。

只、身心を倶に放下して、仏法の大海に廻向して、仏法の教に任せて、私曲を存ずることなかれ。

第九十四章

また、漢の高祖の時、ある賢臣の云く、「政道の理乱は、なわの結ぼれるを解くが如し。急に、すべからず。よくよく、むすびめを見て、とくべし」と。仏道も、亦、かくの如し。

よくよく、道理を心得て、行ずべきなり。

法門を、よく、心得る人は、必ず、強き道心、ある人、よく、心得るなり。

いかに、利智、聡明なる人も、無道心にして吾我をも離れえず、名利をも棄てえぬ人は、道者とも、ならず、正理をも心得ぬなり。

第九十五章

示して云く、

学道の人は、吾我の為に仏法を学することなかれ。

ただ、仏法の為に仏法を学すべきなり。

其の故実は、我が身心を一物も、のこさず放下して、仏法の大海に廻向すべきなり。

其の後は、一切の是非、管すること、なく、我が心を存すること、なく、なし難く忍び難きことなりとも、仏法の為に、つかわれて、しいて、此れをなすべし。

我が心に、強いて、なしたきことなりとも、仏法の道理なるべからざる事は放捨すべきなり。

穴賢（あなかしこ）、仏道修行の功を以て、かわりに善果を得ん、と思うことなかれ。

ただ、一度、仏道に廻向しつる上は、再び自己をかえりみず、仏法のおきてに任せて、行じゆいて、私曲を存することなかれ。

先証、皆、かくの如し。

心にねがい求むること、なければ、即ち、大安楽なり。

世間の人も、他に、まじわらず、己れが家ばかりにて生長したる人は、心のままに、ふるまい、己れが心を先として、人目をしらず、人の心を兼ねざる人は、必ず、あしきなり。

学道の用心も、また、かくの如し。

衆に、まじわり、師に順じて、我見を立せず、心をあらためゆけば、たやすく、道者となるなり。

学道は、先ず、すべからく、貧を学すべし。

名をすて、利をすて、一切、諂(へつら)うこと、なく、万事、なげすつれば、必ず、よき道人となるなり。

大宋国に、よき僧と人にも知られたる人は、皆、貧窮人なり。

衣服も、やぶれ、諸縁も乏しきなり。

往日、天童山の書記、道如 上座と云いし人は、官人、宰相の子なり。しかれども、親族をも遠離し、世利を貪らざりしかば、衣服の、やつれ、破壊したること、目も、あてられざりしかども、道徳、人に知られて、名藺大寺の書記とも成られしなり。

予、あるとき、如 上座に問うて云く、

和尚は、官人の子息にて、富貴の種族なり。

何ぞ、身に、ちかづくる物、皆、下品にして、貧窮なるや？

如 上座、答えて云く、「僧と、なれば、なり」。

第九十六章

一日、示して云く、

俗人の云く、「宝は、よく、身を害する怨なり。昔も、是れ、あり。今も、是れ、あり」と。

云う、こころは、昔、一人の俗人、あり。

一人の美女をもてり。

時に、威勢、ある人、是れを請う。

彼の夫、是れを惜む。

終に、兵を起して、其の家を囲めり。

既に、奪い取られん、とする時、夫が、云く、「我れ、汝が為に、命を失う」と。

女が云く、「我れも、夫の為に、命を失わん」と云いて、高楼より落ちて死す。

そののち、彼の夫、うちもらされて、後に、物語りにせし、となり。

第九十七章

また、云く、

昔、一人の賢人、州吏として国政を行う。

時に、息男、あり。

官事によりて、父を辞し、拝して、去る。

時に、父、一疋の縑（きぬ）を与う。

息の、云く、

君は、高亮なり。

此の縑（きぬ）、いずくよりか、得たるや？

父、云く、「俸禄の、あまりなり」と。

息、さりて、皇帝に奉りまいらせて、その由を奏す。

帝、太（はなは）だ、其の賢なることを感じたまう。

息男、申さく、

父は、名をかくす。

我れは、名を顕わす。

真に、父の賢、勝れたり、と。

此の心は、一疋の縑（きぬ）は、是れ、少分なれども、賢人は利用せざること聞えたり。

また、実の賢人は、名をかくす。

俸禄なれば、使用するよしを云うなり。

俗人、猶お、然り。

況や、学道の衲子、私を存することなかれ。

また、実の道を好まば、道者の名をかくすべきなり。

第九十八章

また、云く、

仙人、ありき。

或人、問うて云く、

如何がして、仙を得ん？

仙人の、云く、

仙を得ん、と思わば、仙道を好むべし、と。

然れば、学人も、仏祖の道を得ん、と思わば、須く、仏祖の道を好むべし。

第九十九章

示して云く、

昔、国王、あり。

国を治めて、後に、諸の臣下に問う。「我、好く国を治む。よく、賢なりや？」と。

諸臣、みな、云く、「帝、甚だ、よく治む。太だ、賢なり」と。

時に、一臣、ありて、云く、「帝は、賢ならず」と。

帝の、云く、「故は、如何？」。

臣が云く、「国を治めて、後、帝の弟に与えずして、息に与う」と。

帝の心にかなわずして、おい立てられて後、また、一臣に問う、「朕、よく仁なりや？」。

臣が云く、「甚だ、仁なり」。

帝の、云く、「其の故、いかん？」。

臣が云く、「仁君には、必ず、忠臣、あり。忠臣は、直言、あるなり。前の臣、太だ、直言なり。是れ、忠臣なり。仁君に、あらずんば、得じ」と。

帝、是れを感じて、即ち、前の臣をめしかえさるるなり。

第百章

また、云く、

秦の始皇のとき、太子の花園をひろめん、と、の玉う。

臣の、云く、「最も、よし。花園、ひろうして、鳥獣、多く集りたらば、鳥獣を以て隣国の軍を防ぐべしや」と。

是れに依て、其の事、止まりぬ。

また、宮殿を作り、柱を漆にぬらん、と言う。

臣の、云く、「最も、然るべし。柱をぬりたらんには、敵、とどまらんか」と。

然あれば、其の事も止りぬ。

儒教の心は、かくのごとく、たくみに言を以て、悪事をとどめ、善事、すすめしなり。

衲子の、人を化する意巧も、其の心、有るべきなり。

第百一章

一日、僧、問うて云く、
智者の無道心なると、無智の有道なると、始終、いかん？
答えて云く、
無智の有道心は、終に、退すること、多し。
智慧ある人は無道心なれども、終には、道心を起すなり。
当世も、現、証、是れ、多し。
然あれば、先ず、道心の有無を云わず、学道を勤むべきなり。
道を学せば、ただ、貧なるべし。
内外の書籍を見るに、貧うして、居所もなく、或は、滄浪の水に浮び、或は、首陽の山にかくれ、或は、樹下、露地に端坐し、或は、塚間、深山に卓菴する人も、あり。
また、富貴にして、財、多く、朱漆をぬり、金、玉をみがきて、宮殿、等を造るも、あり。
倶に、典籍に、のせたり。
然り、といえども、後代をすすむるには、皆、貧にして、財、なきを以て本とす。
訕りて罪業を誡むるには、富みて、財、多きを驕奢の者と云いて誹れるなり。

第百二章

示して云く、

出家人は、必ず、人の施を受けて、喜ぶことなかれ。

また、受けざることなかれ。

故僧正の、云く、

人の供養を得て、喜ぶは、仏制に、たがう。

喜ばざるは、檀越の心に、たがう。

此の故実、用心は、我に供養するに非ず、三宝に供養するなり。

かるがゆえに、彼の返事には、「此の供養は、三宝、定めて、納受、有るべし」と言うべきなり。

第百三章

示して云く、

古に、謂ゆる、「君子の力は、牛に勝れり。然あれども、牛と、あらそわず」と。

今の学人、我が智慧、才学、人に勝れたり、と存ずるとも、人と諍論を好むことなかれ。

また、悪口を以て人を呵嘖し、怒目を以て人を見ることなかれ。

今時の人、多く、財をあたえ、恩を施せども、嗔恚を現じ、悪口を以て謗言する故に、必ず、逆心を起すなり。

昔、真浄文和尚、衆に示して云く、

我、むかし、雲峰と、ちぎりをむすんで、学道せしとき、雲峰同学と法門を論じ、衆寮にて、たがいに高声に論談し、ついには、互に、悪口に及び、諠譁しき。

諍論、已に、やんで、雲峰、我れに謂いて云く、

我と汝と、同心、同学なり。

契約、浅からず。

何が故ぞ、我れ、人と、あらそうに、口入をせざるや、と。

我れ、そのとき、揖して恐惶せるのみなり。

其の後、彼も一方の善知識たり、我れも今、住持たり。

往日、おもえらく、

雲峰の論談、畢竟、無用なり。

況や、諍論は、定まりて、僻事なり。

諍うて、何の用ぞ、と思いしかば、我は無言にして止りぬ、と云々。

今の学人も、最も、これを思うべし。

学道、勤労の志、あらば、時光を惜みて、学道すべし。

何の暇、ありてか、人と諍論すべき?!

畢竟して、自他共に、無益なり。

法門すら、しかなり。

いかに、況や、世間の事において、無益の論をなさんや?!

君子の力、牛にも勝れり、といえども、牛と諍わず。

我れ、法を知れり、彼に、勝れたり、と思うとも、論じて、人を掠め難ずべからず。

若し、真実、学道の人、ありて、法を問わば、法を惜むべからず。

為に、開示すべし。

然あれども、猶、それも、三度、問われて、一度、答うべし。

多言、閑語することなかれ。

我れも、此の真浄の語を見しより後、尤も、此の咎は、我身にも、あり、是れ、我をいさめらるる、と思いし故に、以後、終に、他と、法門の諍論せざるなり。

第百四章

示して云く、

古人、多くは、云う、「光陰、空しく度(わた)ること莫れ」。

また、云く、「時光、徒らに、過すことなかれ」と。

今、学道の人、須く、寸陰を惜むべし。

露命、消えやすし、時光、速かに、うつる、暫くも、存する間、余事を管することなかれ。

唯、須く、道を学すべし。

今時の人、

或は、「父母の恩を捨て難し」と云い、

或は、「主君の命に背き難し」と云い、

或は、「妻子、眷属に離れ難し」と云い、

或は、「眷属、等の活命、存じ難し」と云い、

或は、「世人、誹謗しつべし」と云い、

或は、「貧うして道具、調い難し」と云い、

或は、「非器にして学道に堪えがたし」と云う。

かくのごとく、識、情を廻らして、主君、父母をも離れえず、妻子、眷属をも、すてえず、世情に随い、財宝を貪ぼるほどに、一生、空しく過して、正(まさ)しく、命終の時に当りては、後悔すべし。

須く、静坐して道理を案じ、速かに道心を起さんことを決定すべし。

主君、父母も、我に悟りを与うべからず。

妻子、眷属も我が苦しみを救うべからず。

財宝も、我が生死、輪廻を截断すべからず。

世人も、我をたすくべきにあらず。

「非器なり」と云いて、修せずんば、何れの劫にか、得道せんや？！

只、須く、万事を放下して、一向に、学道すべし。

後時を存することなかれ。

第百五章

示して云く、

学道は、須く、吾我を離るべし。

設(たと)い、千経、万論を学し得たりとも、我執を離れずんば、終に、魔坑に落つべし。

古人の云く、「若し、仏法の身心、なくんば、いずくんぞ、仏となり、祖と成らん?!」と云々。

我を離るる、と云は、我が身心を仏法の大海に抛向して、苦しく、愁うるとも、仏法に随いて、修行するなり。

若し、乞食をせば、人、是れを、わるし、みにくし、と思わんずるなれど、かくのごとく思う間は、いかにしても、仏法に入り得ざるなり。

世の情、見をすべて忘れて、唯、道理に任せて学道すべし。

我身の器量を顧み、仏法に契うまじ、なんど、思うも、我執を持ちたる故なり。

人目を顧み、人情を憚(はば)かるは、即ち、我執の本なり。

ただ、仏法を学すべし。

世情に随うことなかれ。

第百六章

一日、奘、問うて云く、

叢林、勤学の行履と云うは、如何？

示して云く、

只管打坐なり。

或は、楼上、或は、閣下に、定を営み、人に交わりて雑談せず、聾者の如く、瘂者の如くにして、常に、独坐を好むべきなり。

第百七章

一日、参の次でに、示して云く、
泉大道の云く、「風に向いて坐し、日に向いて眠る。時の人の錦を被たるに勝りたり」と云々。
この言は、古人の語なりといえども、少し、疑い、あり。
時の人と云うは、世間、貪利の人を云うか？
若し、然らば、敵対、最も、下れり。
何ぞ、云うに足らん。
若しは、学道の人を云うか？
然らば、何ぞ、「錦を被たるに勝れり」と云うや？
此の心を察するに、猶お、錦を重んずる心、有るか、と聞えり。
聖人は、然、あらず。
金、玉と、瓦礫と、斉しく、執すること、なし。
故に、釈迦如来、牧牛女が乳粥を得て食し、馬麦を得て食す。
いずれも、等しくす。
法に、軽重なし。
人に、浅深あり。
当世、金、玉を人に与うれば、重し、として、取らず。
また、木、石などをば、軽し、として、是を受けて愛す。
金、玉、本より、土の中より得たり。
木、石も、大地より生ぜり。
何ぞ、一つをば、重し、とて、取らず、一つをば、軽し、とて、愛せん？

此の心を案ずるに、重きを得ては、執する心、あらんか。
軽きを得ても、愛する心、あらば、咎は、等しかるべし。
是れ、学人の用心すべき事なり。

第百八章

示して云く、

先師、全和尚、入宋せん、とせし時、本師、叡山の明融阿闍梨、重病、起り、病床に、しずみ、既に、死せんとす。

其の時、かの師、云く、

我、既に、老病、起り、死去せんこと、近きにあり。

今度、暫く、入宋をとどまりたまいて、我が老病を扶けて、冥路を弔いて、然して、死去の後、其の本意をとげらるべし、と。

時に、先師、弟子、法類、等を集めて議評して云く、

われ、幼少の時、双親の家を出て後より、此の師の養育を蒙りて、いま成長せり。

其の養育の恩、最も重し。

また、出世の法門、大小、権実の教文、因果をわきまえ、是非をしりて、同輩にも越え、名誉を得たること、また、仏法の道理を知りて、今、入宋、求法の志を起すまでも、偏に、此の師の恩に非ずと云うこと、なし。

然るに、今年、すでに、老極して、重病の床に臥したまえり。

余命、存しがたし。

再会、期すべきにあらず。

故に、あながちに、是れを留めたもう。

師の命も、そむき難し。

今、身命を顧みず、入宋、求法するも、菩薩の大悲、利生の為なり。

師の命を背きて、宋土に行かん道理、有りや？　否や？

各の思わるる所をのべらるべし、と。

時に、諸弟、人々、皆、云く、

今年の入宋は留まらるべし。

師の老病死、已に極れり。

死去、決定せり。

今年ばかり留りて、明年、入宋あらば、師の命を背かず、重恩をも、わすれず。

今、一年、半年、入宋、遅きとても、何の妨げか、あらん？

師弟の本意、相違せず。

入宋の本意も如意なるべし、と。

時に、我れ、末臘にて、云く、

仏法の悟り、今は、さて、こうこそ、ありなん、と思召さるる儀ならば、御留り、然、あるべし、と。

先師の、云く、然、あるなり、仏法、修行、これほどにて、ありなん。

始終、かくのごとくならば、即ち、出離、得道たらんか、と存ずと。

我が云く、

其の儀ならば、御留りたまいて、しか、あるべし、と。

時に、かくのごとく、各の総評し了りて、先師の、云く、

おのおのの評議、いずれも、みな、留まるべき道理ばかりなり。

我が所存は、然、あらず。

今度、留まりたりとも、決定、死ぬべき人ならば、其れに依りて、命を保つべきにも、あらず。

また、われ、留りて、看病、外護せしによりたりとて、苦痛も、やむべからず。

また、最後に、我、あつかい、すすめしによりて、生死を離れらるべき道理にもあらず。

ただ、一旦、命に随いて、師の心を慰むるばかりなり。

是れ、即ち、出離、得道の為には、一切、無用なり。

錯って、我が求法の志をさえしめられば、罪業の因縁とも成りぬべし。

然あるに、若し、入宋、求法の志をとげて、一分の悟をも開きたらば、一人、有漏の迷情に背くとも、多人、得道の因縁と成りぬべし。

此の功徳、もし、すぐれば、すなわち、これ、師の恩をも報じつべし。

設(たと)い、また、渡海の間に死して、本意をとげずとも、求法の志を以て死せば、生々の願、つきるべからず。

玄奘三蔵のあとを思うべし。

一人の為に、うしないやすき時を空しく過さんことを、仏意に合(かな)うべからず。

故に、今度の入宋、一向に、思い切り畢りぬ、と云いて、終に、入宋せられき。

先師にとりて真実の道心と存ぜしこと、是れらの道理なり。

然あれば、今の学人も、或は、父母のため、或は、師匠の為、とて、無益の事を行じて、徒に、時を失いて、諸道に、すぐれたる、仏道をさしおきて、空しく光陰を過すことなかれ。

時に、奘、問て云く、

真実、求法の為には、有為の父母、師匠、恩愛の障縁を、一向に、すつべき道理は、まことに、然か、あるべし。

ただし、父母、師匠の恩愛、等のかたは、一向に、捨離するも、また、菩薩の行を存ぜん時は、自利をさしおきて、利他を先とすべきか？

然あるに、老師、重病、切にして、また、他人のたすくべきもなく、幸に、保護の、われ一人、其の仁に当りたるを、自らの修行ばかりを思いて、渠(かれ)を扶けずんば、菩薩の行に背けるに似たるか？

ただ、大士の善行をきらうべかず。

縁に随い、事に触れて、仏法を存すべきか？

もし、これらの道理によらば、また、止りて、たすくべきか？

何ぞ、独り、求法を思いて、老病の師を扶けざるや？

いかん？

示して云く、

利他の行も、自利の行も、ただ、劣なる方を捨てて、勝なる方をとらば、大士の善行なるべし。

老病を扶けん、とて、水菽の孝をいたすは、只、今生、暫時の妄愛、迷情の喜びばかりなり。

迷情の有為に背いて、無為の道を学せんは、設(たと)い、遺恨は蒙ること、ありとも、出世の勝縁と成るべし。

是れを思え。

是れを思え。

第百九章

一日、示して云く、

世間の人、多く、云う、「某（それがし）、師の言ばを聞けども、我が心に叶わず」と。

此の言は、非なり。

知らず、其の、こころ、いかん？

若しは、聖教、等の道理の我が心に違背して非なり、と思うか？

これは、一向の凡愚なり。

又は、師の云える言が、我が心に契わざるか？

若し、然あらば、なんぞ、はじめより、師に問うや？

また、日来（ひごろ）の情見を以て云うか？

もし、しかあらば、是れは、無始より、このかたの妄念なり。

学道の用心と云うは、我が心に、たがえども、師の言は、聖教の言、理、ならば、全く、それに随いて、本の我見をすてて、あらためゆくべし。

此の心が、学道、第一の故実なり。

われ、昔日、我が朋輩の中に、我見を執して知識をとぶらいける者、ありき。

我が心に違するをば、心得ず、と云いて、我見に、あい、かなうをば執して、一生、空しく、すぎて、仏法を会せざりけり。

我れ、それを見て、智、発して、しりぬ、「学道は、然、あるべからず」と。

かく思いて、師の言に随いて、全く、道理を得て、其の後、看経の次でに、或る経に云く、「仏法を学せん、と思わば、三世の心を相続することなかれ」と。

誠に、知りぬ、「さきの諸、念、旧見を記持せずして、次第に、あらためゆくべきなり」と云うことを。

書に云く、「忠言、逆、耳」。

いう、こころは、我が為に、忠、有るべき、ことばは、必ず、耳に違するなり。

違するとも、強いて、随い、行ぜば、畢竟して、益、有るべきなり。

第百十章

一日、雑談の次でに、示して云く、

人の心、本より、善悪、なし。

善悪は、縁に随いて、起る。

喩えば、人、発心して、山林に入る時は、林下は「よし」、人間は「悪し」とおぼゆ。

また、退屈の心にて山林を出る時は、山林は「悪し」とおぼゆ。

是れ、即ち、決定して、心に定相、なし。

縁に随いて、兎も、角も、なるなり。

かるが故に、善縁にあえば、心、よくなり、悪縁に近づけば、心、悪くなるなり。

「我が心、本より、悪し」と思うことなかれ。

ただ、善縁に随うべきなり。

第百十一章

また、云く、

人の心は、決定、人の言ばに随う、と存ず。

大論に云く、

喩えば、愚人の手に摩尼珠をもてるが如し。

人、是れを見て、「汝、下劣なり。自ら、手に物をもてり」と云うを聞きて、おもわく、「珠は、おしし。名聞は、深し。我れは、下劣ならん」とおもう。思い煩うて、猶お、ただ、名聞にひかれ、人の言ばについて、珠を捨て、他人にとらしめん、と思うほどに、終に、珠を失う、と云々。

人の心は、かくのごとし。

一定、此の言ば、我が為に、「よし」と思えども、名聞にさえられて、それに順わざるも、あり。

また、一定、我為に、あしき事、と思いながらも、名聞の為なれば、先ず、随う人も、あり。

悪にも、善にも、随うときは、心は、善悪につるるなり。

故に、いかに、もとより、悪しき心なりとも、善知識に随い、良人に馴るれば、自然に、心も、よくなるなり。

悪人に近づけば、我心にも、初めは、悪し、と思えども、終に、その人のこころに随い馴るるほどに、おぼえず、やがて、実に、悪しく成るなり。

また、人の心、決定して、他に物をとらせじ、と思えども、他人、強いて、こいぬれば、にくし、とおもい、いやながらも、与うるなり。

また、決定して、与えん、と思えども、便宜なく、時、すぎぬれば、また、やむ事も有るなり。

然あれば、学人、たとい、道心、なくとも、良人に近づき、善縁にあうて、同じ事をいくたびも聞き、見るべきなり。

この言、一度、聞きたらば、重ねて聞くべからず、と思うことなかれ。道心、一度、起したる人も、同じ事なれども、聞くたびごとに、心、みがかれて、いよいよ、精進するなり。

また、無道心の人も、一度、二度こそ、つれなくとも、度々、聞きぬれば、霧露の中に行くが如く、いつ、ぬるるとも覚えざれども、自然に、衣の、うるおうが如くに、良人の言をいくたびも聞けば、自然に、はずる心も起り、実の道心も起るなり。

故に、知りたる上にも、聖教をば、いくたびも見るべし。

師の言も、聞きたる上にも、重ねて、聞くべし。

いよいよ、ふかき心、有るべきなり。

学道の為に、さわりと成るべき事をば、重ねて、是れに近づくべからず。

善友には、くるしく、わびしくとも、近づきて、行道すべきなり。

第百十二章

示して云く、

大慧禅師、ある時、尻に腫物、出ぬれば、医師、此れを見て大事の物なり、と云う。

慧の云く、

大事の物ならば、死ぬべきや？　否や？

医師、云く、

ほとんど、あやうかるべし。

慧の云く、

若し、死ぬべくんば、いよいよ、坐禅すべし、と云いて、猶お、強て、坐しければ、其の腫物、うみ、つぶれて、別の事、なかりき。

古人の心、かくのごとし。

病をうけては、いよいよ、坐禅せしなり。

今の人、病、なくして、坐禅、ゆるくすべからず。

病は、心に随いて、転ずるか、と覚ゆ。

世間に、しゃくりする人に、虚言して、わびつべき事を云い、つげぬれば、それをわびしつべき事に思い、心に入れて陳ぜんとするほどに、忘れて、其の、しゃくり、留りぬ。

我も、そのかみ、入宋の時、船中にて、痢病せしに、悪風、出来て、船中、さわぎける時、やまう忘れて、止りぬ。

是れを以て思うに、学道、勤労して他事を忘るれば、病も起るまじきか、と覚ゆるなり。

第百十三章

示して云く、

俗の野諺に云く、「啞せず、聾せざれば、家公とならず」と。

云う、こころは、人の毀謗をきかず、人の不可をいわざれば、よく、我が事を成ずるなり。

かくのごとくなる人を、家の大人とするなり、と。

是れ野諺なりといえども、是れを取りて、衲僧の行履に用うべし。

他のそしりに、とりあわず、他の恨みに、とりあわず、他の是非をいわずして、如何んが、道を行ぜん。

徹骨徹髄の者は、是れを得べきなり。

第百十四章

示して云く、

大慧 禅師の云く、

学道は、須く、人の千、万貫の銭を債いけるが、一文をも持たざるに、乞、責めらるる時の心の如くすべし。

若し、この心、あれば、道を得ること、やすし、と、いえり。

信心銘に云く、

至道、かたきこと、なし。

唯だ、揀択を嫌う、と。

揀択の心だに放下しぬれば、直下に、承当するなり。

揀択の心を放下する、と云うは、我をはなるるなり。

仏道を行じて、代りに利益を得ん為に仏法を学す、と思うことなかれ。

只、仏法の為に仏法を修行すべきなり。

縦(たと)い、千経、万論を学し得て、坐禅の床を坐破するとも、此の心、なくんば、仏祖の道を得べからず。

只、すべからく、身心を放下して、仏法の中に置きて、他に随いて、旧見、なければ、即ち、直下に、承当するなり。

第百十五章

示して云く、

古人の云く、「所有の庫司の財穀をば、因を知り果を知る知事に分付し、司を分ち、局を列ねて、是を司どらしむ」と。

いう、こころは、主人は、寺院の大小の事、都(すべ)て、管せず、只管、工夫、打坐して大衆を勧むべきゆえなり。

また、云く、

「良田、万頃よりも、薄芸、身に随わんには、しかず。

施恩は報をのぞまず。

人に与えて、悔ゆる事なかれ。

口を守ること、鼻の如くすれば、万禍も及ばず」と云えり。

行、高ければ、人、自ら、重んじ、

才、多ければ、人、自ら、帰伏するなり。

深く耕して、浅く、ううる、猶お、天災、あり。

己れを利して、人を損する、豈に、果報ならんや?!

学道の人、話頭を見る時、目を近づけ、力を尽して、よくよく、見るべし。

第百十六章

示して云く、

古人の云く、「百尺、竿頭に、さらに一歩をすすむべし」と。

此の心は、十丈の竿のさきに、のぼりて、なお、手足をはなちて、すなわち、身心を放下するが如くすべし。

是れに付いて、重々の事あり。

今時の人は、世をのがれ、家を出でぬるに似たれども、其の行履をかんがうれば、なお、実に、出家の遁世にては、なきなり。

いわゆる、出家と云うは、第一、まず、吾我、名利を離るべきなり。

是れを離れずんば、行道は、頭燃を払い、精進は翹足をしるとも、只、無理の勤苦のみにて、出離には、あらざるなり。

大宋国にも、離れ難き恩愛を離れ、捨て難き世財を捨て、叢林にまじわり、祖席をうる人、あれども、審細に、此の故実を知らずして行ずる故に、道をも悟らず、心をも明めずして、徒らに、一期を空しく過すも、あり。

その故は、人の心も、初めは、道心を起して、僧にもなり、知識にも随えども、仏となり、祖とならん事をば思わずして、身の貴く、我が寺の貴きよしを施主、檀那にも知られ、親類、眷属にも、いいきかせて、人に、とうとびられ、供養せられん、と思い、剰(あまつさ)え、衆僧は、皆、無当不善なれども、我れ独り道心も、あり、善人なる由を方便して云いきかせ、思いしらせん、とする様も、あり。

是れ等は、云うに足らざるもの、五闡提、等の悪比丘のごとし。

決定、地獄に落つる心ばえ、なり。

これを、もののもしらぬ一向の在家人は、道心者、貴き人なり、と思えり。

此れを少し、たちいでて、施主、檀那をも貪らず、父母、妻子をも捨てはてて、叢林に交りて行道するも、あれども、本性、懶怠、懈怠なる者は、ありのままに懈怠する事も慙かしければ、長老、首座、等の見る時は、相かまえて、行道するよしをなして、見ざる時は、事に触れて、怠り、徒らに、おくるも、あり。

是は、在家にして、さ、のみ、無当ならんよりは、よけれども、猶お、吾我、名利を捨得ざるなり。

また、総じて、師の心もかねず、首座、兄弟の見るをも見ざるをも顧みず、常に思わく、仏道は、人の為ならず、身の為なり、とて、我身心こそ仏となり祖とはならん、と真実に勤め営む人も、あり。

是れは、以前の人々よりは、まことの道者か、と覚ゆれども、これも、猶お、我が身、よくならん、と思いて修する故に、なお、いまだ、吾我を離れず。

また、諸、仏、菩薩に随喜せられんことを思い、仏果、菩提を成ぜんことを思うも、我欲、名利の心、なお、すて得ざる故なり。

此等までは、いまだ、百尺の竿頭を離れず、とりつきたるが如し。

只、身心を仏法になげすてて、更に、悟道、得法までをも望む事なく、修行するを以て、是を不汚染の行人とは云うなり。

有仏の所にも、とどまることをえず、無仏の所をも急に走過す、と云うは、此の心なり。

第百十七章

示して云く、

衣食の事は、兼てより、思い、あてがうことなかれ。

若し、失食、絶煙せば、其の時に臨んで、乞食せん。

その人に用事いわんなど思い設けたるも、即ち、物を貯うる邪命食にてあるなり。

衲子は、雲の如く、定れる住所もなく、水の如くに、流れゆきて、よる所もなきをこそ、僧とは云うなり。

縦(たと)い、衣鉢の外に、一物を持たずとも、一人の檀那をも頼み、一類の親族をも頼むは、即ち、自他ともに、縛住せられて、不浄食にてあるなり。

かくのごとくの不浄食、等を以て、やしない、もちたる身心にて、諸仏、清浄の大法を悟らん、と思うとも、とても契うまじきなり。

たとえば、藍にそめたる物は青く、蘗(きはだ)にそめたる物は黄なるが如く、邪命食なるべし此の身心を以て、仏法をのぞまば、沙を圧して油を求むるが如し。

只、時にのぞみて、兎も角も、道理に契うように、はからうべきなり。

かねて、とかく、思い、たくわうるは、皆、たがうことなり。

よくよく、思量すべきなり。

第百十八章

示して云く、

学人、各、知るべし、人々、大なる非、あり、憍奢、是れ、第一の非なり。

内外の典籍に、是れを、等しく、戒めたり。

外典に云く、「貧うして諂わざるは、あれども、富んで奢らざるは、なし」と、いいて、なお、富を制して、奢らざらん事を思うなり。

最も、これ、大事なり。

よくよく、これを思うべし。

我が身、下賤にして、高貴の人に、おとらじ、と思い、人に勝れん、と思うは、憍慢の、はなはだしきものなり。

しかあれど、是れは、戒め、やすし。

また、世間に自体、財宝に豊かに、福分もある人は、眷属も囲遶し、人も、ゆるす。

それを是(ぜ)とし、憍るゆえに、傍らの賤き人は、これを見て、うらやみ、いたむべし。

人のいたみを自体、富貴の人、いかようにか、つつしむべきや。

かくの如き人は戒めがたく、その身も慎むこと、ならざるなり。

また、心に憍心は、なけれども、ありのままに、ふるまえば、傍らの賤き人は、うらやみ、いたむべきなり。

是れをよく、つつしむを憍奢をつつしむ、とは、云うなり。

我身の富は果報にまかせて、貧賤の人、見て、うらやむをはばからざるを憍心と云うなり。

外典に云く、「貧家の前を車に乗りて過ぐることなかれ」と。
しかあれば、我が身、朱車に、のるべくとも、貧人のまえをば、はばかるべし、と云々。
内典も、亦、かくの如し。
然あるに、今の学人、僧侶は、智慧、法門を以て人に勝つべき、と思うなり。必ずしも、此れを以て、憍ることなかれ。
我より劣れる人のうえの非義を云い、或は、先人、傍輩、等の非義をしりて、いい、誹謗するは、是れ、憍奢の、はなはだしきなり。
古人の云く、「智者の辺にしては、まくるとも、愚者の辺にして、勝つべからず」と云々。
我が、よく知りたる事を人の悪く心得たりとも、他の非を云うは、また、是れ、我が非なり。
法門をいうとも、先人、先輩を誹らず、また、愚痴瞢昧なる人の、うらやみ、ねたみつべきところにては、よくよく、是れを思惟すべし。
予も、建仁寺に寓せし時、人、多く、法門、等を問いき。
その中には、非義も過患も有りしかども、此の儀をふかく存じて、只、ありのままに、法の徳を語りて、他の非をいわず、無為にして、やみき。
愚者の執見、ふかきは、我が先徳の非を云うとて、かならず、嗔恚を起すなり。
智慧ある人の真実なるは、仏法の道理をだにも、こころえぬれば、人は、いわざれども、我が非、及び、我が先徳の非をも思いしりて、あらたむるなり。
かくのごとき等の事、よくよく、思いしるべし。

第百十九章

示して云く、

学道の最要は、坐禅、これ、第一なり。

大宋の人、多く、得道すること、みな、坐禅のちからなり。

一文不通にて無才、愚痴の人も、坐禅をもっぱらすれば、その禅定の功により て多年の久学、聡明の人にも勝るるなり。

しかあれば、学人は、祇管打坐して、他を管することなかれ。

仏祖の道は、只、坐禅なり。

他事に順ずべからず。

第百二十章

ときに、奘、問うて云く、

打坐と、看読と、ならべて、これを学するに、語録、公案、等を見るには、百、千に一つも、聊か、心得ることも出来るなり。

坐禅には、それほどのことの験も、なし。

然あれども、猶お、坐禅を好むべきか？

答えて云く、

公案、話頭を見て、聊か知覚、有る様なりとも、それは、仏祖の道に、とおざかる因縁なり。

無所得、無所悟にて、端坐して、時を移さば、即ち、祖道なるべし。

古人も、看語、祇管坐禅、ともに、勧めたれども、猶お、坐をもっぱらに、すすめしなり。

また、話頭に依りて、さとりをひらきたる人、あれども、其れも、坐の功に依りて、さとりの、ひらくる因縁なり。

まさしき功は、坐によるべし。

正法眼蔵随聞記 第六

侍者 懐奘 編

第六巻

第百二十一章

示して云く、

人を愧ずべくんば、明眼の人を愧ずべし。

予、在宋の時、天童の浄和尚、侍者に請するに、いわく、

元子は、外国人たりといえども、器量人なり、と云いて請す。

予、堅く、此れを辞す。

其の故は、和国に聞えん為にも、学道の稽古の為にも、大切なれども、衆中に具、眼の人、ありて、外国人として、大叢林の侍者たらんこと、大国に、人、なきに似たり、と難ずることやあらん、最も、はじつべし、と思いて、書状を以て此の旨をのべしかば、浄和尚、聞いて、国を重んじ、人を愧ずることを感じ、許して、更に請じ玉わざりしなり。

第百二十二章

示して云く、
或る人の云く、
我は、病者なり。
非器なり。
学道には、たえず。
法門の最要を聞いて、独住、隠居して身をやしない、病をたすけて、一生を終えん、と思う、と。
これは、太だ、非なり。
先聖、必ずしも、金骨にあらず。
古人、豈に、咸く、皆、上器ならんや?!
滅後を思えば、いくばくならず。
在世を考うるに、人々、みな、俊なるに、あらず。
善人もあり、悪人もあり。
比丘衆の中に、不可思議の悪行なるも、あり、最下品の器量もあり。
しかあれども、卑下し、やめりなん、と称して、道心をおこさず、非器なり、と云いて、学道せざるは、なし。
今生に、若し、学道、修行せずんば、何れの生にか、器量の人となり、無病の者と成りて、学道せんや?!
只、身命を顧りみず、発心、修行するこそ、学道の最要なれ。

第百二十三章

示して云く、
学道の人、衣食を貪ることなかれ。
人々、皆、食分、あり、命分、あり。
非分の食命を求むるとも、得べからず。
況や、学、仏道の人には、おのずから、施主の供養、あり。
常乞食、たゆべからず。
また、常住物も、これ、あり、私の営みに、あらず。
果蓏と乞食と信心施との三種の食は、皆、是れ、清浄食なり。
其の余の、田商士工の四種の食は、皆、不浄の邪命食なり。
出家人の食分に、あらず。
昔、一人の僧、あり、死して冥途に行く。
閻王の云く、
此の人は、命分、いまだ、つきず。
かえすべし、と。
冥官、云く、
命分、つきず、といえども、食分、すでに、尽く。
王の云く、
荷葉を食せしむべし、と。
しかりしより、その僧、よみがえりて後、人中の食物、食することをえず、
只、荷葉のみを食して残命を保てり。
しかあれば、出家は、学仏のちからによりて食分も尽くべからず。

白毫の一相、二十年の遺因、歴劫に受用すとも尽くべきにあらず。

ただ、行道を専らにして、衣食を求むべきには、あらざるなり。

身体、血肉だに、よく、もてば、心も随いて、よくなる、と医方、等にも見えたり。

いわんや、学道の人、持戒、梵行して、仏祖の行履に任せて、身を治むれば、心も随いて調うなり。

学道の人、言ばを発せん、とする時は、三度、顧て、自利、利他の為に、利、あるべくんば、是れを云うべし。

利、なからん言語は、止まるべし。

かくのごときの事も、一度には、えがたし。

心にかけて、漸々に、習うべきなり。

第百二十四章

雑話の次でに示して云く、

学道の人、衣食に、わずらうことなかれ。

此の国は、辺地、小国なりといえども、昔も今も、顕密の二教に名をえ、後代にも、人にも、知られたる人、おおし。

或は、詩歌、管絃の家、文武、学芸の才、其道を嗜む人も、おおし。

かくの如き人々、未だ、一人も、衣食に豊かなり、と云うことを聞かず。

皆、貧を忍び、他事を忘れて、一向に、其の道を好む。

ゆえに、其の名をも得るなり。

いわんや、祖門、学道の人は、渡世を捨てて、一切、名利に走らず。

何としてか、豊かなるべきぞ?!

大宋国の叢林には、末代なりといえども、学道の人、千、万人ある中に、或は、遠方より来り、或は、郷土より出たるも有り。

いずれも、多分は、貧なり。

しかあれども、いまだ、貧をうれえとせず。

只、悟道の未だしきことをのみ愁えて、或は、楼上、或は、閣下に坐して、考妣に喪するが如くにして、一向に、仏道を修するなり。

まのあたり、見しことは、西川の僧、遠方より来れりし故に、所持の物、なし。

纔(わずか)に、墨、二、三丁もてり。

そのあたい、両、三百文、此国の両、三十文にあたれるを持ちて、唐土の紙の下品なる極めて弱きを買いとりて、襖（うわぎ）、或は、袴（はかま）などに作りて、きぬれば、起ち居に、破るる、おとして、あさましきをも顧みず、うれえざるなり。

或る人の云く、

汝、郷里にかえりて、道具、装束、ととのえよ、と。

答えて云く、

郷里、遠方なり。

路次の間に、光陰を空うして、学道の時を失せんことを憂う、と云いて、猶更に、寒をも愁えずして、学道せしなり。

しかある故に、大国には、よき人も出来るなり。

第百二十五章

示して云く、
伝え聞く、
昔日、雪峰山の開山の時は、寺、貧窮にして、或は、絶煙し、或は、緑豆飯をむして食して、日を送りて、学道せしかども、後には、一千五百人の僧、常に断えざるなり。
昔の人は、かくのごとし。
今も、また、かくのごとくなるべし。
僧の損ずることは、多く、富貴より起るなり。
如来、在世、調達が嫉妬を起せしことも、日に五百車の供養より起れり。
唯、自らを損ずるのみに非ず、亦、他をして悪をなさしむる因縁なり。
実の学道の人、何としてか、富貴なるべき?!
たとい、浄信の供養も、多く、つもらば、恩の思いを作して、報を思うべし。
此の国の人は、また、我が為に利を思いて、施をいたす。
笑いて向える者に、よく与うるは、さだまれる世の道理なり。
只、他の心に、したがわんとして、なさば、これ、学道の障りなるべし。
只、飢を忍び、寒を忍びて、一向に、学道すべきなり。

第百二十六章

一日、示して云く、
古人の云く、
聞くべし、見るべし、得るべし。
また、云く、得ずんば見るべし、見ずんば聞くべし、と。
云う心は、聞かんよりは見るべし、見んよりは得るべし、未だ得ずんば見るべし、未だ見ずんば聞くべし、と、なり。

第百二十七章

また、云く、

学道の用心は、只、本執を放下すべし。

まず、身の威儀をさきとして、あらたむれば、心も随いて、改まるなり。

先ず、律儀、戒行を守れば、心も随いて、改まるべし。

宋土には、俗人、等の常の習いに、父母に孝養の為に、宗廟にて、各々、聚会し、泣くまねをするほどに、終には、実に、泣くなり。

初心、学道の人は、只、衆に随いて、行道すべきなり。

はやく、用心、故実、等を学し知らん、と思うことなかれ。

用心、故実、等のことも、只、独り、山にも入り、市にも、かくれて、行ぜん時、あやまりなく能く知りたるは、好(よ)きことなり。

衆に随いて行ぜば、道を得べきなり。

たとえば、船にのりて行くには、我は漕ぎゆくようをも知らざれども、よき船師に任せてゆけば、知りたるも、知らざるも、彼の岸に至るが如し。

善知識に随いて、衆と共に、行じて、私、なければ、自然に、道人となるなり。

学道の人、たとい、悟りを得ても、今は至極、と思うて、行道をやむることなかれ。

道は、無窮なり。

悟りても、猶お、行道すべし。

むかし、良遂 座主の麻谷に参ずる因縁を思うべし。

第百二十八章

示して云く、

学道の人は、後日をまちて行道せん、と思うことなかれ。

ただ、今日、今時をすごさずして、日々、時々を勤むべきなり。

爰(ここ)に、ある在家人、長病せしが、去年の春のころ、予に、あい、ちぎりて云く、

当時の病い療治せば、必定、妻子を捨て、寺の辺に庵室をかまえむすんで、一月、両度の布薩にあい、日々、行道、法門談義を見聞して、随分に、戒行を守りて、生涯を送らん、と云いき。

その後、種々に療治せしに依りて、少き減気あり。

しかれども、亦、再発ありて、日月、空しく、すごしき。

今年、正月より、俄に、大事になりて、苦痛、次第に、せむるほどに、日来(ひごろ)、支度する庵室の道具をはこびて作るほどの、ひまもなき故に、先ず、人の庵室をかりて住せしが、わずかに、一両日の中に、死し去りぬ。

前夜に、菩薩戒をうけ、三宝に帰して、臨終、よくして終りぬれば、在家にて妻子に恩愛を惜み狂乱して死せんよりは、尋常ならねども、去年、思いよりたりし時に、在家を離れて、寺にちかづき、僧になれて行道して、おわりたらば、すぐれたらまじ、と存ずるにつけても、仏道修行は後日を待つまじき事、と覚るなり。

身の病者なれば、病いを治して後より、修行せん、と思うは、無道心のいたす所なり。

四大和合の身は、誰か、病、無からん?!

古人、必ずしも、金骨にあらず。

只、志だに至りぬれば、他事を忘れて、行ずるなり。

大事、身の上に来れば、必ず、小事を忘るる習いなり。

仏道は一大事なれば、一生に窮めん、と思いて、日々、時々を空しく、すごさじ、と思うべきなり。

古人の云く、「光陰、虚く度ることなかれ」と云々。

病を治せん、と営むほどに、除かずして、増気し、苦痛、いよいよ、せめば、少しも痛の、かるかりし時に、行道せん、と思うべし。

強き痛みを受けては、尚お、重くならざる、さきに、と思うべし。

重くなりては、死せざる、さきに、と思うべきなり。

病を治するには、滅ずるも、あり、増するも、あり。

また、治せざれども、滅じ、治するに増するも、あり。

これを、よくよく、思い分くべきなり。

行道の人、居所、等を支度し、衣鉢、等を調えて後に、行道せん、と思うことなかれ。

貧窮の人、衣鉢、資具に、とぼしくして、調うを待つほどに、次第に、臨終、ちかづきよるは、いかん？

ゆえに、居所を待ち、衣鉢を調えて後に、行道せん、と欲せば、一生、空しく過すべきなり。

只、衣鉢、等は、なけれども、在家も、仏道は行ずるぞかし、と思いて、行ずべきなり。

また、衣鉢、等は、只、有るべき僧体のかざりなればなり。

実の仏道、行者は、それにもよらず、より来らば、有るに任すべし。

あながちに、求むることなかれ。

有りぬべきを持たじ、とも思うべからず。

病も治しつべきを、わざと死せん、と思いて、治せざるも、外道の見なり。

仏道の為には、命を惜むことなかれ。

亦、惜まざること、なかれ。

より来らば、灸治、一所、煎薬、一種、なんど、用いん事は、行道の障りとも、ならじ。

行道をさしおきて、病を治するをさきとして、後に、修行せん、と思うは、非なり。

第百二十九章

示して云く、

海中に龍門と云う所ありて、洪波、しきりに、たつなり。

諸の魚ども、彼の所を過ぎぬれば、必ず、龍となるなり。

故に、龍門と云うなり。

いま思う、彼の所、洪波も他所に、ことならず。

水も、同じくしわはゆき水なり。

然れども、定まれる不思議にて、魚ども、彼の所を渡れば、必ず、龍となる。

魚の鱗も、あらたまらず、身も、同じ身ながら、たちまちに、龍となるなり。

衲子の儀式も、亦、かくのごとし。

所も、他所に、ことならねども、叢林に入りぬれば、必ずしも、仏となり、祖となるなり。

食も、人と同じく喫し、衣も、同じく服し、飢を除き、寒を禦(ふせ)ぐことも、斉しけれども、只、髪を剃り、袈裟を着して、食を斎粥にすれば、忽ちに、衲子と成るなり。

成仏作祖、遠く求むべきにあらず。

只、叢林に、入ると、入らざるとは、彼の龍門を、過ぐると、過ぎざるとの、別の如し。

また、俗の云く、「我れ、金を売れども、人の、買う、なし」と。

仏祖の道も、亦、かくのごとし。

道を惜むには、あらず。

常に、与うれども、人の、得ざるなり。

道を得ることは、根の利鈍には、よらず。
人々、皆、法を悟るべきなり。
精進と、懈怠と、によりて、得道の遅速あり。
進怠の不同は、志の、至ると、至らざると、なり。
志の至らざることは、無常を思わざる故なり。
念々に死去す。
畢竟して、且くも、留まらず。
暫く、存せる間、時光を空しく、すごすことなかれ。
古語に云う、「倉にすむ鼠、食に飢え、田を耕す牛、草に飽かず」と。
云う心は、食の中にありながら、食に、うえ、草の中に住しながら、草に乏し。
人も、かくのごとし。
仏道の中に有りながら、道に、かなわざるものなり。
名利、希求の心、止まざれば、一生、安楽ならざるなり。

第百三十章

示して云く、

道者の行は、善行、悪行につき、皆、おもわく、あり。

凡人の量る所に、あらず。

昔、慧心僧都、一日、庭前に草を食う鹿を、人をして打ち追わしむ。

時に、或る人、問うて云く、

師、慈悲、なきに似たり。

草を惜みて、畜生を悩ますか？

僧都の云く、

しか、あらず。

吾れ、若し、是れを打ち追わずんば、此の鹿、ついに、人になれて、悪人に近づかん時は、必ず、殺されん。

この故に、うち、おうなり、と。

これ、鹿を打追うは、慈悲、なきに似たれども、内心は、慈悲の深き道理、かくのごとし。

第百三十一章

一日、示して云く、

人、ありて、法門を問い、或は、修行の法要を問うこと、あらば、衲子は、かならず、実を以て是れを答うべし。

若(もしく)は、他の非器を顧み、或は、初心、未学の人にて心得べからずとして、方便、不実を以て答うべからず。

菩薩戒の心は、縦(たと)い、小乗の器、ありて、小乗の道を問うとも、只、大乗を以て答うべきなり。

如来、一期の化儀も、亦、同じ。

方便の権教は、実に、無益なり。

只、最後の実教のみ、実に、益、あり。

しかあれば、他の得、不得を論ぜず、只、実を以て答うべきなり。

若し、箇中の人を見ば、実徳を以て是れを見るべし。

外相、仮徳を以て、これを見るべからず。

昔、孔子に、一人、あり、来りて、帰す。

孔子、問うて云く、

汝、何を以てか、来りて、我に帰するや？

云く、

君子、参内の時、此れを見しに、顕々として、威勢あり。

故に、帰す。

ときに、孔子、弟子に命じて乗物、装束、金銀、財物、等を取出して、此れを与えて、「汝は、我に帰するに、あらず」と云いて、かえせり。

第百三十二章

また、云く、

宇治の関白殿、ある時、鼎殿に到りて火を焚く所を見玉えば、鼎殿、是れを見て、云う、「いかなる者ぞ、案内、なく、御所の鼎殿へ入る?」と云いて、追出されて後、関白殿、先の悪き衣服、等をぬぎ、かえて、顕々として、装束して、出たまう時、さきの鼎殿、はるかに見て、恐れ入りて、にげにき。

時に、殿下、装束を竿の先に、かけ、拝せられけり。

人、これを問う。

答えて云く、

吾れ、他人に貴びらるること、我が徳には、あらず。

只、此の装束ゆえなり、と云えり。

おろかなる者の、人を貴ぶこと、かくのごとし。

経教の文字、等を貴ぶことも、亦、かくのごとくなり。

古人の云く、

言は、天下に満つれども、口過、なく、

行、天下に遍けれども、怨害、なし。

是れ、即ち、云うべき所を云い、行うべき事を行う故なり。

是れは、至徳要道の言行なり。

世間の言行も、私曲を以て、はからい、行うは、おそらくは、過、のみ、あらん。

衲子の言行は、先証、是れ、定まれり。

私曲を存すべからず。

仏祖、行じ来れる道なり。

学道の人、各々、自ら、己身を顧るべし。

身を顧る、と云うは、吾が此の身心、いか様に、持つべきぞ、と顧るべし。

然るに、衲子は、すでに、是れ、釈子なり。

如来の風儀を慣うべきなり。

身口意の威儀は、先仏、行じ来れる作法、あり。

各々、其の儀に随うべし。

俗すら、猶お、「服は法に応じ、言は行に随うべし」と云えり。

況や、衲子は、一切、私を用うべからず。

第百三十三章

示して云く、

当世、学道する人、多分、法を聞く時、先ず、能く領解する由を知られん、と思い、答の言ばの、よからん様を思うほどに、聞く、ことばが、耳を過すなり。

総じて、詮ずる所、道心、なく、吾我を存するゆえなり。

只、須く、先ず、吾我を忘れて、人の云わんことを能く聞き得て、後に、静に、案じて、難もあり、不審もあらば、追うても、難じ、心得たらば、重ねて、師に呈すべし。

当座に領する由を呈せん、とするは、法を能くも聞き得ざるなり。

第百三十四章

示して云く、

唐の太宗の時、異国より、千里の馬を献ぜり。

帝、これを得て、喜ばずして、自ら、謂えらく、

縦(たと)い、我、独り、千里の馬に乗りて、千里を行くとも、随う臣、なくんば、

其の詮、なきなり、と。

故に、魏徴を召して、此れを問い玉えば、徴、云く、

帝の心と同じ、と。

依りて、彼の馬に、金帛をおおせて返さしむ。

世間の帝王だにも、無用のものをば、蓄えたまわずして、かえせり。

況や、衲子は、衣鉢の外は、決定して、無用なり。

無用の物、是れを貯えて、なににか、せん？

俗すら、猶お、一道を専らに嗜むものは、田苑、荘園、等を持することを要とせず。

只、一切、国土の人を百姓、眷属とも、するなり。

「相法橋、遺嘱、子息」

ただ、すべからく、当道をもっぱら、はげますべし、と云えり。

況や、仏子は、万事を捨て、専ら一事を嗜むべし。

是れ、第一の用心なり。

第百三十五章

示して云く、

学道の人、参師聞法の時に、よくよく、極めて、聞き重ねて聞きて、決定すべし。

問うべきを問わず、云うべきを云わずして、過しなば、必ず、我が損なるべし。

師は、必ず、弟子の問を待ちて言を発するなり。

心得たることをも、いくたびも問いて、決定すべきなり。

師も、弟子に、「好(よ)く心得たるか?」と問いて、云いきかすべきなり。

第百三十六章

示して云く、

道者の用心は、常の人に異ること、あり。

故建仁寺の僧正、在世の時に、寺中、絶食すること、ありき。

時に、一人の檀那、僧正を請じて、絹、一疋を施す。

僧正、歓喜して、人にも、もたしめず、自ら取て、懐中して、寺に帰りて、

知事に与えて、云く、

明旦の浄粥、等に作すべし、と。

然るに、ある俗人の所より、所望して、云く、

愧かましき事、有りて、絹、二、三疋、入用、あり。

少々にても、あらば、給わるべき由を申す。

僧正、即ち、さきつかたの絹を取返して、すなわち、これを与う。

時に、知事の僧も、衆僧も、思の外に、不審するなり。

後に、僧正、云く、

各は、僻事とこそ、思わるらん。

然れども、吾が思わくは、衆僧は、面々、仏道の志、有りて、集れり。

一日、絶食して餓死するとも、苦しかるべからず。

世に交れる人の、さしあたりて、事、欠る、苦悩を扶けたらんは、各の為にも、利益、すぐれたるべし、と云えり。

まことに、道者の、案じ入りたること、かくの如し。

第百三十七章

示して云く、

仏々祖々、皆な、本は、凡夫なり。

凡夫の時は、必ずしも、悪業もあり、悪心もあり、鈍もあり、痴もあり。

然あれども、尽く、改めて、知識に随いて、修行せしゆえに、皆、仏祖と成りしなり。

今の人も、然、あるべし。

我が身、愚鈍なれば、とて、卑下することなかれ。

今生に、発心せずんば、何の時を待ちてか、行道すべきや?!

今、強いて、修せば、必ずしも、道を得べきなり。

第百三十八章

示して云く、

帝道の故実の諺に云く、「虚襟に非ざれば、忠言をいれず」と。

云う心は、己見を存せずして、忠臣の言ばに随いて、道理にまかせて、帝道を行わるるなり。

衲子の学道の用心、故実も、亦、かくのごとくなるべし。

わずかも、己見を存せば、師の言ば、耳に入らざるなり。

師の言ば、耳に入らざれば、師の法を得ざるなり。

只、法門の異見を忘るるのみにあらず、世事、及び、飢寒、等を忘れて、一向に、身心を清めて聞く時、親しく聞き得るなり。

かくのごとく、聞く時は、道理も、不審も、明らめらるるなり。

真実の得道と云うは、従来の身心を放下して、只、直下に他に随いゆけば、即ち、まことの道人となるなり。

是れ、第一の故実なり。